

日本科學英雄傳

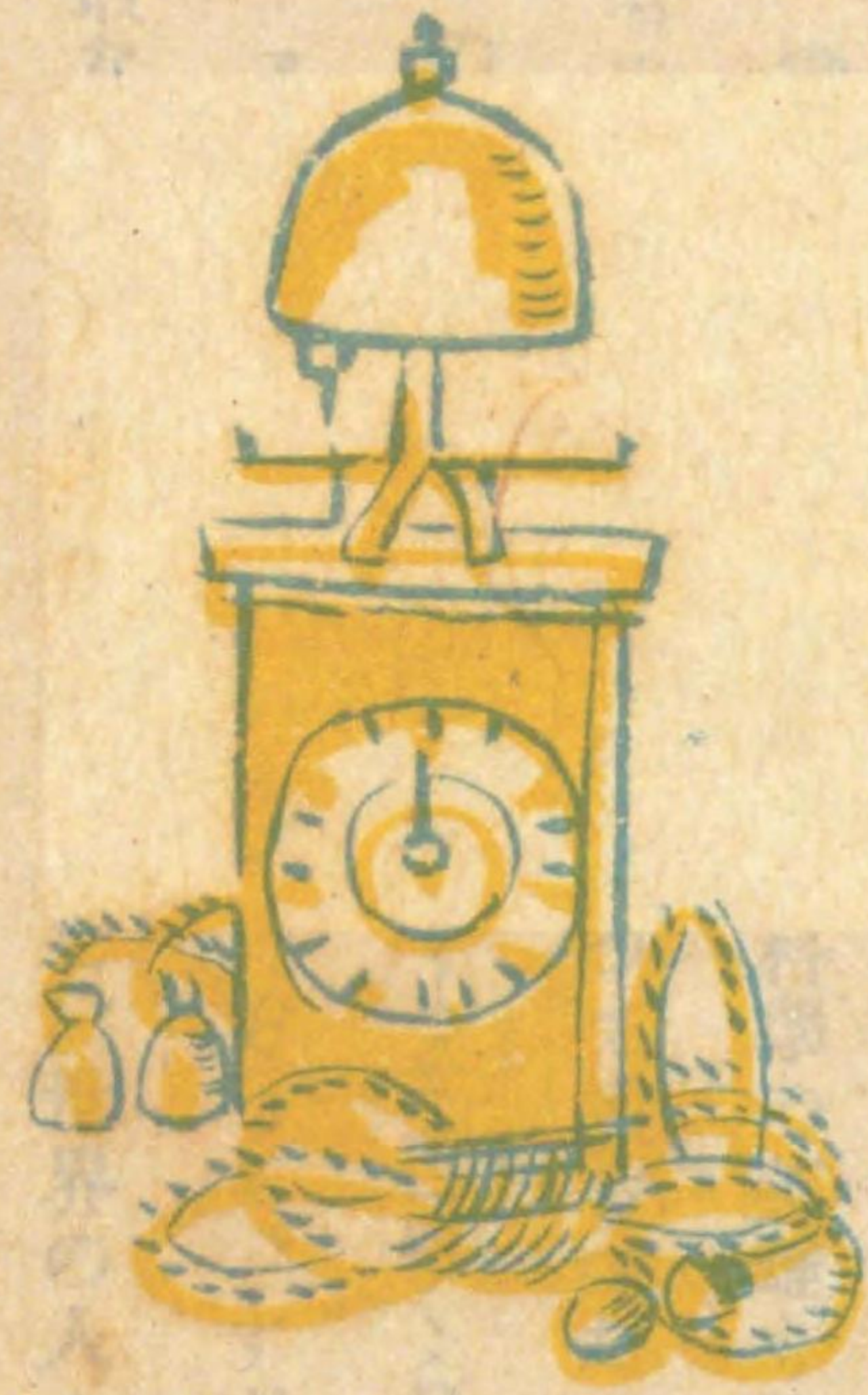
海國兵談





海國兵談

日本科學英雄傳



貴司山治

貴司山治

國民圖書

附録(科學英雄)



貴山

少國民諸君へ

戦争に強いばかりでなく、日本人は昔から科學の仕事にもすぐれてゐたのである。僕たちの祖先は、國をよくしようとして、科學の仕事においても、命をなげだしてはたらいだ。わが國には、戦争の英雄だけでなく、科學の英雄も昔からたくさん出てゐるのだ。その英雄たちのはたらきを、諸君に知ってもらひたい。

この本は、それらの人々の生涯をのべるために、およそ十冊くらの書くつもりだ。諸君は、熱心に注意深く、これを読んでくれたまへ。そして、すぐれた祖先の正しい科學の精神と、その勇敢なるはたらきをうけついで、世界の人々をもみちびく立派な、大東亞日本の科學をつくり出す人となつてくれたまへ。

昭和十七年夏

貴 山 治

日本科學 英雄傳 海國兵談 目次

一 書物奉行の子……………三
 二 一家の運命……………六
 三 父のをしへ……………二二
 四 子平の決心……………二〇
 五 工藤平助……………三三
 六 藤塚式部……………三〇
 七 江戸まで走る……………三九
 八 文武大學校の設計……………四九

九 「三國通覽圖說」……………六八
 一〇 世界地圖をみて……………九五
 一一 アーレン・ヘイト……………一〇〇
 一二 長崎の別れ……………一二三
 一三 富國論……………一二九
 一四 先見の明……………一二五
 一五 「海國兵談」の苦心……………一三三
 一六 高山彦九郎……………一三七
 一七 友の慰め……………一四五
 一八 蒲生君平……………一五二

一九 眞の科學者……………一五七

二〇 「海國兵談」の「まへがき」と「あとがき」……………一六二

二一 「海國兵談」卷の一……………一六六

二二 「海國兵談」卷の二……………一八〇

二三 千古の獨見……………一八八

二四 子平捕はる……………二〇二

二五 ひとりずまゐ……………二〇九

二六 教訓いろは歌……………二二六

二七 子平の死……………二二六

——目次了——

包紙	伊藤熹朔
表紙	眞垣武勝
挿畫	「海國兵談」より

日本科學英雄傳

海國兵談



林子平

一、書物奉行の子

江戸時代、六代將軍徳川家宣いへのふの家來に、岡村源五兵衛といふ武士があつた。小納戸役こなほといふ役についてゐたが、源五兵衛は大そう學問が深く、立派な武士であつたので、書物奉行をもかねてゐた。

書物奉行といふのは、將軍家の圖書館長のやうな役目であつたが、のちには次第にこれが發展して、いまの帝國大學みくにの源みなもととなつたのである。

それほどの役目だから書物奉行といへば江戸時代には、名譽の役柄やくがらであつた。

この書物奉行をつとめてゐる間に、岡村源五兵衛は皇室や武家の古いしきたりをしらべて「儀式攷かぎ」といふ十巻の本を著はした。又年とつてからも「仙臺閑話」

といふ本も書いた。將軍家からは六百二十石の祿を與へられ、四方に門のついた立派な邸をもらつてそこに住んでゐた。

源五兵衛は新井白石と友だちであつた。そしてふだんから、白石がすぐれた學者であることを深く尊敬してゐた。だからわが子の子平がわづかに三歳になつた時、源五兵衛は早くも白石の「采覽異言」や「蝦夷志」「西洋紀聞」などを讀んでさせた。

白石のこれらの本は蝦夷（北海道の古い名）のことや、世界の國々のことをのべたものである。そのころは鎖國といつて、幕府は日本人が外國と交通することはもとより、外國の本を讀むことなどをかたく禁じてゐたので、世界の有様がどうなつてゐるかを知ることが、容易なことではなかつた。

新井白石は、賢明な學者で、幕府に重く用ゐられてゐたため、これではならぬと考へ、將軍に説いて、みづから外國の事情をしらべ、それを「采覽異言」や「西洋紀聞」と題する本に著はしたのである。ことに「采覽異言」と「西洋紀聞」はそのころ、日本へ漂着したヨハン・シドツチといふキリスト教の坊さんに、白石がみづから世界の事情や地理をきいて著はした本である。

源五兵衛の子の子平は、まだ三歳にしかならないのに智能がすぐれて發達して父のをしへてくれる外國の知識は一つのこらず覺えるのであつた。日本の外の海の遠くにはさまざまの國があつて、そこではたえず戦争などが行はれ、弱い國が強い國にほろぼされ、又英雄があらはれてたくさん國々をうちたひらげたりしてゐることを、幼い子平は早くから知つたのである。

そして、子平は心の中でひとり考へた。……自分たちの生れた日本の國は、小さな島國で、まだ力が弱いのである。もし、世界のほかの大きな國からわが國を

攻めてきたらどうして防げばいいだらうか？

子平には、それはどうしていいかまだちつともわからなかつた。しかし、大きくなつたら、敵を防ぎ、國を守る方法を考へ出さなければならぬ。きつと考へ出さう！ 幼い子平は、深くさう決心したのであつた。

二、一家の運命

ところで、父の同役のものに、大鳥忠太夫といふ武士がゐた。

この時代は、すでに太平がつゞいて、徳川氏の政治が亂れ、役人といへば賄賂をとつて、よくないことをするのを、まるであたりまへに思ふやうになつてゐた。大鳥忠太夫もさうした役人の一人であつた。とりわけ忠太夫は卑しい行ひの多い武士

であつた。源五兵衛は忠太夫のことをいつもこゝろよからず思つてゐた。

その内に、日とともに忠太夫の卑しい行ひがつのつてきたので、源五兵衛は「ほんたうの武士ならば心を改め、行ひを直すべきである。」と忠太夫に忠告した。しかし、忠太夫は少しもきき入れなかつた。源五兵衛は決心をして、上役に忠太夫の卑しい行ひを告げて罰を加へるやうにとつたへた。ところがちどろいたことに、上役の者も賄賂をとつたり、悪い行ひをずるぶんしてゐるので、源五兵衛のうつたへを一向にとりあげようとしなかつた。それどころか、上役はかへつて忠太夫をかばつて「源五兵衛は、お前をおとしいれようとしてゐるから氣をつけろ。」と、源五兵衛がうつたへたことを知らせたのである。

忠太夫は自分の卑しい行ひを改めようとはせず、それをうつたへた源五兵衛をうらんで、ある夜、途中に待ち伏せをして、いきなり源五兵衛に斬つてかゝつた。

源五兵衛は「何をッ！」と、自分の刀をぬいて忠太夫を斬り伏せた。

忠太夫はかへつて一刀のもとに斬りたふされてしまったのである。

その時源五兵衛は少しばかり負傷をしたので、町醫者をしてゐる弟の林從吾のところへかけつけて行つて手當てをしてもらった。そして、すつかりわけを話して、

「たとへ奸物かんぶつにしろ、同役の者を斬つた上は、罪は免れない。しかし忠太夫のやうな悪い人間を斬つたために罪を得るのは残念だから、わしはこのまゝ姿をくらすつもりだ。あとはどうかお前にたのむ。」

弟の從吾は深くもうなづいて兄の一家をひきうけることを誓つた。その夜のうちに、岡村源五兵衛は江戸から行方をくらましてしまつたのである。

あとにのこつた子平をはじめ、源五兵衛の家族たちにとつては、これはまことに悲しい出来事であつた。でもしかし、それはもう仕方がないことであつた。源五兵

衛の母と妻と五人の子と、あはせて七人の家族たちは、にはかにきのふにかはるおちぶれた身の上となつて、弟の家に引きとられることになつた。

源五兵衛の弟の林從吾は武士ではなく、今もいふとほり町醫者であつた。しかし一方において、從吾は仙臺藩の醫員となつて、わづかながら手當てをもらつてゐたので、兄の子供たちの教育に事を缺くやうなことはなかつた。とりわけ、從吾には子供がなかつたので、五人の兄の子供を、わが子のやうにして育てた。

はじめ、引きとつた時、姉の奈與なよは十三歳であつた。妹の奈保なほは九つ、弟の友諒は五つ、子平は三つであつたが、まだ下に生れたばかりの多知といふ小さい妹がゐた。

三年の月日がたつて、子平が六歳になつた時、叔父さんの從吾が醫者としてつかへてゐる仙臺の藩主伊達吉村が大名の位をわが子宗村にゆづり、自分は袖が崎とい

ふところに別邸をつくつてそこに隠居した。

その別邸に召し使ふお女中が入用だといふので、係りの家來たちが、家來たちの家族の中から、禮儀が正しく性質のすぐれた娘をさがしてゐた。その結果、子平の姉の奈保が選り出された。奈保は十二歳であつた。美しい娘であつたばかりでなく、しとやかで大そう性質がよく、文字などもきれいに書き、歌をつくるのなども上手であつた。伊達吉村は奈保のかしこいのに感心して、かの女が十六歳になつた時、わが子宗村の奥方にした。

父は行方が知れず、貧しい中に叔父に育てられた子平たち兄妹の中から、仙臺六十二萬石の大名の妻となる娘が出たのだ。奈保は「お清の方」と呼ばれ、伊達宗村の子を二人生んだ。

しかし、子平たち一家の運命は又かはつた。寶曆二年の春、子平が十五歳の時

に、親の代りとなつて自分を育て、くれた叔父の林從吾が死んでしまつた。

久しく姿をかくしてゐた父源五兵衛は、常陸ひたちの方へ行つて世を忍んでくらしつてゐた。もうよほど年月もたつた上に、わが子をたのんでおいた弟が死んでしまつては、うちすててはあげないので、菅笠に顔をかくして江戸にかへつてきた。

常陸にゐる間、源五兵衛は弟の苗字の林をとつて、林摩詰まきつと名をかへてゐた。今江戸にかへつてきても、もとの岡村源五兵衛と名乗るわけにはいかない。笠に顔をかくして一生を過すといふ意味で林笠翁りんかさうと號した。

久しぶりに父を迎へた子供たちの内、奈保だけが、仙臺侯の奥方となつてゐるためにあふことはできなかつたけれど、他の子供らはみな大きくなつてゐて、喜んで父を迎へた。十三年目に再びもとのやうな楽しい一家にかへつたのである。

三、父のをしへ

源五兵衛は將軍の家來であつたが、弟の林從吾は、さきにもいつたとほり、仙臺藩のお抱へ醫者であつた。子平たち兄弟はその從吾叔父に育てられたのだから、仙臺藩では、子平の父が奸物の仲間を斬つて行方をくらましてゐたのが、ひそかに從吾の家に歸つてきたと知つても、見て見ないふりをした。しかしおもてむきには、源五兵衛をとりたてることができなないので、源五兵衛の子の嘉膳、すなはち、子平の兄を、林從吾の相續人に定めた。

兄嘉膳は、百五十石の知行をもらつて、仙臺藩の武士となつた。その父の源五兵衛は、今は林笠翁となつて、子供たちと一しよに暮してゐた。嘉膳も子平も、父上々々といつて、父を大切にした。

子平たちの住居はそのころ、愛宕下の仙臺藩中屋敷である。もし幕府の役人が、笠翁の昔のことをききだして、召しとるやうなことがあつてはならないといふはからひから、仙臺藩の中屋敷の中に住むことになつたのである。

笠翁はわが子のために、「平常心がくべき數々のこと」といふ修養のための、教へ書をつくつてあたへた。それには今でも昭和の少國民諸君が、ぜひ實行して、いゝことが書いてある。

林子平は一所懸命にこの父の教へを守つて、後世までも、日本國民の模範となるやうな、偉い人物になつたのである。その中の二つ三つを、やさしい言葉になほして、こゝへ書いておかう。

一、兄弟睦じく、何ごとも相談してやつて行くこと。

三、父のをしへ

子平の父は、子平たちに、第一にこのことを教へた。兄弟たちが仲よく力になりあふことができないやうでは、だれだつて立派な大人にはなれない。このことをよく心に入れて、諸君も今日から實行に移したまへ。

次ぎに、子平たちの住居は、今いふとほり、仙臺藩中屋敷の中にあつたのだから、正門の出入には時間が定つてゐた。父はそのことを教へた。

一、時間にあくれてはならない。

なんでもないやうなことであるが、時間を守り、規律を正しくすることのできる子供が、大人になつて立派なことができるやうになるのである。

一、着物はいつも、きちんと着てゐなければならぬ。

一、自分の室の中に、いらぬものを集めたりしてはならない。

一、朝寝をしてはいけない。先勞無倦の四字を忘れてはならない。

先勞無倦といふのは、何事も勤勉によく働いて、途中でなげやつたり、怠けてはいけないといふことである。

一、ひまがあつたら、必ず、本を讀んで勉強なさい。日本の古いことを書いた本を讀むのがよい。

笠翁は、日本の古いことを調べる學者であつたから、とくにさういひ添へたのである。

一、お酒を飲んではいけない。

その他たくさんあることを子平たちは父から戒められたのである。そして子平は兄とともにその教へをよく守り、これらのことを必ず實行したのである。

ある日、父は、嘉膳と子平を前に呼んで、かういふ話をした。

「お前たちは一生涯質素にくらさなければならぬ。それについてかういふ話があ

る。小野淺右衛門といふ侍は二千石とつてゐた。しかし一生の間、革の袴を一枚はいたきりで、夏も冬もすごした。革の袴なら、破れも汚れもしないといふのである。また林右衛門といふ侍も二千石とつてゐる身分であつたが、自分の娘を近藤宮内といふ五千石とつてゐる侍へ嫁入りさせる時、家來の樋口休意におんぶさせてやつた。休意は、三尺ほどの棒を一本こしらへてきて主人の娘をおんぶすると、その尻に棒をあてがひ、自分は麻袴を着て、お嫁入りの役目をつとめた。近藤宮内の家では澤山の家來が、提灯をともし、家の前にならんで、お嫁入りの行列がくるのを待つてゐた。そこへ休意が、たゞ一人で主人の娘をおんぶしてのりこんできたので、その突飛なやり方にすつかりびつくりした。しかし何事も質素にしなければならぬと考へてかういたしました、といふ主人の口上を休意からきいて、相手の近藤宮内の家では林右衛門のやり方に大そう感心したといふことである。」

またある時、父はかういふ話もした。

「お前たちは、だん／＼大人になつてくると、友達とのつきあひを規律正しくしなければいけない。中には悪い友達もあつて、よくないところへ遊びに行かうとか、だらしないことをすゝめるものもあるかも知れない。その時は、いきなり自分はそのなところへ行くのはいやだといふよりは、さういふよくないところへ行つたり、だらしないことをすると、父や母が心配しますからおさきへ家に歸ります、といつてことわるのがよい。しかし、人は一人一人みな心が違ふものだ。どんな立派な人にもかならず癖がある。その癖をいやがつてゐては、立派な人にもつき合ひをしないことになる。馬を見よ。駿馬にはかならず癖がある。したがつて乗りにくい。驚馬には何の癖もないからたいいの人は驚馬の方を好く。しかし、癖のある駿馬を乗りこなすほどの者でなければ馬の名人にはなれない。それと同じやうに、

癖はあつても、才能のある多くの人と、氣をつけてつき合つてゆくことによつて、自分も磨かれるのである。」

父からかういふ教へを受けてゐるとき、子平はまだ十六歳であつた。子平は父の教へをよく守つて、兄を敬ひ、かつて一度も兄に向つて不平を言つたり、争つたりしたことはなかつた。

また父から言はれるまでもなく、子平は生れつき質素で、剛健な性質であつた。その頃は武士が平和に慣れて、きれいな身装をしたり、刀などは金や銀で飾りをしたのをさし、女のやうに、齒におはぐるをつけてゐる武士さへあつた。さういふ時代であつた。

それでも子平は、緋の木綿の着物一枚に、膝節も出るかと思はれるやうな短い袴をはき、鐵造りの長い刀を腰にさし、少し遠くへ出かけるときには、草鞋をはい

て、まるで戦國時代のやうな姿をしてゐた。しかし、子平は決してだらしのないまねはしなかつた。木綿の着物でも、それを襟を合せてきちんと着て、袴は正しくはいてゐた。

そして父の教への通り、子平の勉強する部屋には、机と、書物と、書物を入れる小さな書棚のほか、よけいなものは何にも置いてなかつた。

朝は太陽よりも早く起きて、朝寝をするといふやうなことは一度もなかつた。朝早く子平は、勉強にとりかゝつて一心不亂に學問をした。書からは、劍術や、馬術や、柔道も習つた。酒は一滴も飲まなかつた。父の教へをよく守つて、立派な人となり、國のために、役にたゝなければならぬと思つたのである。

四、子平の決心

林子平は十九歳となつた。木綿緋きめんがすりを着て、短かい袴をはき、腰には長い刀をさして江戸の町を歩く子平の二つの眼は、敵に向ふ人のやうに光つてゐた。

藩の仲間の武士が戯れに、子平をつかまへて、

「まるで君は今にも戦いくさに出かけるやうな身なりをしてゐるが、この太平の世に、どこに戦いくさがあるのかね。」

と、きいた。子平は鋭い目つきをして、

「武士は太平の世にもいつも戦時にある覺悟をしてゐなければならぬのだ。」

と、答へた。すると友達は大きな聲で笑つた。子平は武士の本分を忘れた友達を

心で輕蔑けいべつしてゐた。しかし、父の教へに従つて、さうしたことで人と争ふのはよくないと思つて、黙つてゐた。

これらの友達を避けていつも書物を讀み、關東のいたるところを旅行して、たえず野宿を重ね、方々の地方の地理、風俗、人情などをしらべて歩き、實地に學問を勵んだ。さうした長い旅行から江戸に歸つてくると、子平の顔は日にやけて髪は亂れ、袴は破れて、頬ひげはのび、草鞋わらぢは土にまみれて、まるで戦場から歸つたやうな姿であつた。

仙臺藩の武士たちは、子平のことを變り者だ、偏屈者へんくつものだといひはやし、ある者は狂人だといつてあざけつた。

しかし子平の心は、自分に對するさうしたうはさには少しも驚かなかつた。旅行によつて歴史を知り、地理を調べて、やがては日本の國をよくする方法を工夫くふうしな

ければならないと考へてゐた。

五、工藤平助

子平は今は一人ぼちであつた。一人の友達もゐなかつた。

旅行から歸つてくると、小さな部屋にとちてもつてすぐまた勉強に勵んでゐる子平を見て、父の笠翁がいつた。

「子平、お前は工藤平助先生を知つてゐるか？」

「知りません。」

「工藤は、叔父の從吾の友達だ。林の家と同様もとは仙臺藩の醫師ぢや。」

と、父が工藤平助のことを話した。平助は工藤家へ養子にきた人だが、そのもと

は長井太雲たいうんといふ紀州の醫師の三番目の子であつた。醫師工藤丈庵ぢやうあんの養子となつて後を繼いだ時に、

「わしは醫者だけれども、坊主のやうに頭を剃つてべろりとしたなりをしてゐるのはいやだ。」

と、いつてやはり鬚まげを結び、武士の姿をしてゐた。とても雄辯家で、學者であつた。平助は日本の學問も支那の學問も修めてゐたが、和蘭オランダの學問にも長たけてゐる。したがつて、外國の事情などもよく知つてゐた。

「お前の叔父が生きてゐる間は、時々ゆききをしてゐたが、今はお前がたづねていつて、工藤先生の教へを乞ふといふ。」
と、父がいつた。

「それでは、工藤先生をたづねることにいたします。」

子平は父に教へられて、築地の方に住んでゐる工藤平助をたづねて行つた。

工藤平助はその時すでに六十三歳であつた。平助は今いふとほりの學者であつたが、經濟のことにも明るかつたので、ずるぶんお金も溜めた。平助は、だれか立派な人がゐて、役に立つことに使ふのなら自分のお金をやりたいと思つてゐた。

子平はそんなことは何も知らなかつた。平助の家の廣い立派な部屋にとほされた。みるとその部屋には、千兩箱を五つも六つも積み重ねて置いてあつた。千兩箱といふのは、千兩の小判を入れた四角な木の箱である。その頃の千兩といへば、今の何萬圓といふお金である。とても重たかつた。

「おう、お前さんが林從吾さんの甥せまか？」

と、大きな聲でいつて平助がでゝきた。そして子平がまだ何にも答へない前に、
「どうだ、お前さんは片手でこの千兩箱をさし上げることができるか。」

と、笑つた。

「できます。」

と、子平は進みでた。

「ではさし上げてみる。」

さういはれて、子平は、千兩箱をかゝへあげると、「うん。」と力んで、肩の上にひきずり上げ、はずみをつけていきなり片手で宙にさし上げた。やがて、どしんと下おろした。

平助はその千兩箱を、子平の方に押しやりながら、

「すこし下し方がまづいが、力がある。褒美に、これをお前さんにあげよう。」

今もいふ通り、千兩といふのは、何萬圓といふ大金である。それを溜めるのは、人によつては、一生かゝるかも知れない。それほどの大金を、平助は、はじめてあ

つた子平にやるといふのだ。子平はしかし、この千兩箱をもらふ氣はなかつたのだ。

「ほしくありません。」

と、辭退した。

平助はきいた。

「どうして、ほしくないのだ。」

「もつと他に頂きたい大切なものがありますから。」

「金よりも大切なものとは何だ。」

「學問です。」

「よろしい。」

平助は笑つてうなづいた。

「ほんたうに學問して國のために働きたいといふものは、腕つぶしも強くなければ駄目だ。それでわしのところへくる者には、はじめにこの千兩箱を持ち上げさせて見せるのだが、近頃の武士は力が弱くてだれもこれを持ち上げることができない。」

子平はその時、平助にきいた。

「學問をするのになぜ力があるのです。」

「では、お前にきくが、何のために學問をするのだ。」

「國のために盡したいからです。」

「それならば、學んで覺えたことを實行に移さなければなるまい。」

「さうです。私もその決心です。」

「それなら、體が強くなければ實行できないではないか。學問に志してそのために武藝に勵み、力を養ふぐらゐの心がけのあるものは、ほんたうに學んだことを實行

して國に盡したいといふ考へを持つてゐる證據だ。お前はどうかやらさうらしい。しかし、學んだことを行ひ、國に盡すためには、時にはお金がなくてはならないこともある。そのためには、學問に志すものは金を賤しんではならない。だからわしはいつでも、かういふ風に千兩箱を用意してゐる。ほんたうに生きた學問のできる立派な弟子に分けてやりたいために。」

すると子平はそこに兩手をついて答へた。

「私は工藤先生にあつて、はじめてほんたうの學問の師にあつたと思ひます。これから一所懸命に勉強して國の役に立つ學者になりますからこのお金はその時、あらためていただきます。」

さういつて、子平は千兩箱を、平助の方へおしかへした。

「よろしい。それでは明日から私のところへやつてきなさい。」

と、平助が答へた。

かうして、林子平は工藤平助の弟子になつたのである。平助は若い時から、醫者の職業に満足せず、丁度子平と同じやうに粗末な着物を着て、笠を被り、刀をさし、草鞋をはいて、たつた一人で關東地方から奥州をめぐり歩き、蝦夷に渡つて、その頃まだたれにも知られてゐなかつた北海道を、實地に探檢した。その地理、風俗などを「赤蝦夷風説考」といふ書物に著はして世に知られてゐた。

かうしてほんたうに國の役に立つことをしようとすれば、平助のやうに、艱難を凌いで實地にその地を探檢しなければならぬ。途中で雪や嵐にあひ、狼や熊にも出あふ。その時、武士のたしなみがなければ命を落すよりほかはない。

「國のために役にたつ學問をしようと思へば、體が強くなければいけない。」

と、平助が子平にいつたのは、平助自身が實地に北海道を探檢してきた生きた學

者だからであつた。

子平は翌日から、この平助の門にはいつて、奥羽地方の地理や北海道の地理、北海道に住むアイヌ人の風俗、習慣などを、くはしく學んだ。

六、藤塚式部

その年の五月に、仙臺の藩主伊達宗村が世を去つた。宗村の妻であつた子平の姉のお清の方は、夫の死を悲んで、髪を剃り落して尼あまとなり、圓智院と名乗つた。そして、宗村を葬つた仙臺の龍雲院といふ寺の傍に、小さな庵いほを建ててそこに隠れ住むことになつた。

そのつぎの年の夏には、兄の嘉膳も一家をあげて仙臺に移つて行つた。子平も江

戸を去つて仙臺に住まなければならなかつた。

こえて、子平が二十四歳になつた寶曆ほうれき十一年の春、姉の圓智院は三十歳で世を去つた。子平はどんなに姉の死を悲しんだか知れない。ところが次ぎの年の九月には兄の嘉膳の妻が、傳染病にかゝつて世を去つた。兄は御殿につとめて、たえず殿様の傍にゐるので、妻が傳染病に罹かると、殿様に迷惑を及ぼしてはならないからといつて、家に歸らなかつた。

子平は兄に代つて、この姉の看護を一所懸命にした。

姉は子平の親切な看護をたいそうよろこびながら、病氣が重くなつてとうとう死んでしまつた。子平は、夫に思ひを残しながら世を去つた姉の心をあはれに思つてその枕もとに聲をたてて泣き沈んだ。

さうした一家の不幸のうちにも、年が明けて、明和元年めいわげんとなつた。子平は今二

十七歳である。學問に熱心で武士としての出世などは少しも考へなかつたので、子平は未だに兄の家に一しよにくらしてゐた。相變らず友達もなかつた。しかし、子平が仙臺に歸つてきてから、たつた一人つき合つてゐる立派な友達があつた。それは鹽竈神社の神主をつとめてゐる藤塚式部である。

鹽竈神社は古い、尊い神社である。その神主である藤塚式部は、子平のやうに、地理學の知識や世界の狀勢などはあまり知らなかつたが、日本の國體についてはよく知つてゐて、神代かみよ以來、日本が 天皇の治しるしめす國であることをよくわきまへてゐた。

子平は仙臺から五里の道のりを遠しとせず、たえず鹽竈神社の境内にある式部の家をたづねて行つた。

「蝦夷の向ふにはカラフトといふ國がある。又エトロフといふ島などがあつて、それは日本の領地なのにまだだれも行つたことがない。ぐづぐづしてゐると、ロシアがやつてきて、自分の領土にしてしまふかも知れなう。」

子平が熱心に話すと、式部は、

「日本の國は昔は天子の治める立派な御代がつゞいてゐたのに、中頃から、武士がはびこつて世を亂してしまひ、今は、もしロシアが日本の北の端からせめてこんできても、それをうち拂ふ力もないくらゐになつてしまつた。」

と、いつて嘆いた。そして日本の國をもつと強く盛んにするためにはどうしても徳川將軍が日本の國を朝廷におかへし申し上げ、天子様が多くの偉い家來を膝もとにお集めになつて、政まつりごとを遊ばすのでなければならぬ、といふ意見を述べた。ところが、子平は、ぢつと式部の顔をみつめて考へてゐたが、

「それは君が武士でなく神主だからさういふことをいふのだ。日本の國は天子さま

のものにちがひないが、その政まつりごとを將軍家にお任せになり、將軍家は臣下として國を良くすることに勵むのが役目である。もしその役目を天子様におかへしすれば、天子様はかへつて將軍家を、役目を怠るものとして、おとがめになると思ふ。」

式部は、強く首をふつた。

「いや、そんなことはない。もとは、天子様が、關白太政大臣をお傍そばに置いて、日本の國の政を遊ばされたのだ。ところが、關白の位にのぼつた藤原氏が、天子様の寵ちよつに慣なれて、ほしいまゝのことにするやうになり、世の中が亂れてきた。その時、平清盛の父が、北面の武士といつて、御所の北側の階下に坐つて、天子様をお守りする役目であつたのが、大勢の家來をひきつれ、刀を閃めかして御所の階上にのぼり、藤原氏たちを斥けた。その時から平氏が勢ひをえて日本の國の政を始めた。しかし、平氏も藤原氏に劣らず、天子様をないがしろになし奉つた。そこへあらはれ

た源頼朝が、平氏を伐ち平らげた。その頼朝は、天子様から征夷大將軍に任せられて、京都を遠くはなれた鎌倉に幕府を設けた。この時から國の政まつりごとがはつきりと武家の手にうつつてしまつたのである。源氏は北條氏に滅ぼされ、北條氏は足利氏に、足利氏は織田信長に、信長のあとは秀吉が繼ぎ、更にそのあとを徳川氏が襲つて、平氏から徳川氏に至る何百年の間、武家の政治は、すべて、天子様のお旨に叛いた勝手な政治である。決して君のいふやうなものではない。これを天子様のお手もとにとりかへすのが、日本の國をもとの姿にして立派に榮えさせるほんたうの道なのである。」

式部が自分の知つてゐる國學の知識に照して、かうして熱心に歴史の實際を話しても、子平はまだ少しも賛成せず、

「しかし、徳川氏は天子様のお位を犯すやうなことは決してしたことはない。最初

から臣下の禮をとつて、天子様の御委任をうけて政治をしてゐるのである。この上は、京の朝廷と江戸の幕府が、君臣一體となつて、國を守ればいゝではないか。」

子平は式部の顔をみつめたまゝ、どこまでも自分の意見をいひ張つた。式部は、子平が外國に對して日本の國を守ることを考へてゐる點では大へん正しいのにかゝらず、國體に對する考へがまちがつてゐると思つたけれども、今にわかるだらうと思つた。

子平は式部が黙つてしまふと自分の意見が正しかつたやうに思つて、歸つてきた。しかし、今日きいた式部の話は、子平には、はじめて知つた新しい知識であつた。だから、式部の言つたことがいつまでも子平の心にかゝつてならなかつた。そのため何時の間にか又式部をたづねて行つて、同じ意見をたゞかはすのであつた。

式部はおとなしいけれども、いくら大きな聲で、子平がその意見をのべても、やはり、君の考へは間違つてゐるのだと最後には答へた。

子平は、氣がぬけて、今はしを〜と、式部の家から我が家へ歸つてくるのであつた。

二人は仲の良い友達であつたが、どうしても國體についてだけは意見が一致しなかつた。

その頃、徳川氏は、將軍家治はるの時代であつた。日本は徳川氏の政治の力によつてとにかく平和にすごしてゐたのである。外國の船が、開國をせまるために日本へやつてくるといふやうなことはまだ百年も後のことであつたので、外國に對して國を守らなければならないといふ考へや、幕府に日本を任してゐてはならないから、皇政維新を計らなければならない、といふ考へはまだ誰の心にもあつてゐないと

いつてよかつた。

したがつて子平が、朝廷と幕府の君臣和合が國の理想と考へてゐるのも、時代の關係からいへば、必ずしも無理とはいへなかつたのかもしれない。しかし、さうした時代に、藤塚式部のやうに、日本の古い歴史を學んで、天皇の尊いことを、心から知つてゐる學者だけが、皇政維新の時がこなければ、日本の國がほんたうによくならないのだといふ考へをひそかに抱いてゐた。

この時代に、かうした尊皇の大義をわきまへてゐるものは、きはめて少なかつたが、藤塚式部の如きは、その一人であつたのである。そして式部の友達に、蒲生君平べいや高山彦九郎がゐた。この三人が互ひに尊皇の心を誓つてゐたのである。

林子平は愛國の考へは、早くから持つてゐたが、この三人の人々にくらべると、尊皇の考へにはまだ眼ざめてゐなかつたのである。子平のために、それは惜しいこ

とだけどもいたし方がなかつた。

七、江戸まで走る

ある日、子平は、勉強のひまに、仙臺の町の南の方にある中町橋といふ橋の袂たもとで魚を釣つてゐた。

そこは、仙臺から江戸に通ずる往來であつたために、江戸からはる／＼歸つてきたらしい旅の者が、

「江戸では、もうすぐ朝鮮國の使ひがやつてくるさうだ。大そうにぎやかな行列が見られるのを、惜しいことに早く歸つてきてしまつた。」

と、いひながら橋の上を過ぎて行つた。子平は思はず、釣竿をなげ捨て、立ち上

つた。そして橋の上でその旅人を呼び止めると、

「朝鮮人はいつ江戸に来るのだ。」

と、きいた。旅人は答へた。

「今頃はもうきてゐるでせう。」

「あゝ、それをみたかつた。」

子平がいかにくやしうにいふのをきいて、旅人は笑ひながら、

「しかし、朝鮮の使節はまだしばらくは江戸に滞在してゐるはずですよ。いそいで行けば、歸りの行列が見られるかも知れません。」

と、いひのこして過ぎて行つた。子平は橋の上に、腕を組んで一人で立つてゐた。今まで日本の國內の地理、風俗を實地に研究するために旅行をして野や山にねることはなれてゐるので、今から江戸へ行くくらゐは何でもないと思ひ、

「かねて、みたいと思つてゐた朝鮮人の風俗を知るためには、いい折りである。行かう！」

と、決心した。學問のためには他をかへりみない平生の強い決心が、子平を動かしたのである。子平はその場から、家へも歸らず、釣竿は川に投げ込んだまゝ、中町橋の上から、まづすぐに江戸の方へ走り出した。

子平は旅費も持つてゐない。着物も平生のまゝだ。仙臺から江戸までは、歩いて行けばおよそ百里の道のりであつた。朝鮮の使節が滞在してゐる間に江戸に着かなければならない。さう思ふと子平は百里の道を、まるで徒競争のやうに走り出した。旅行にはなれてゐたけれども、今度は何の用意もしてゐなかつたので、半日走ると、はいてゐた草履が切れてしまつた。子平ははだしになつて、なほも走りつゝけた。

夕方になると、腹がすいてきた。馬子のとまる安宿にはいつて、まづいお湯づけのめしを食べ、足を休めて一夜を過したが、朝になると、わづかな宿錢さへ拂ふことができない。

子平は腰にさしてゐた粗末な小刀を賣り拂つて旅費にした。そして朝早くまた走りはじめた。旅人をのせて往來を行く一人の馬子は、刀もさしてゐないはだしの武士があとから走つてくるのをみて、

「あゝびつくりした。」

と、叫んで道をよけた。またある馬子は子平がどうして走つて行くのか不思議に思つたらしく、自分も馬をひいてうしろからついて走つてきながら、

「もし〜、お侍さん。」

と、よび止めた。

「何だ。」

子平は走りながら馬子をふりかへつた。

「あなたはどこまでいらつしやるのです。」

「江戸まで行くのだ。」

「へえ、こゝから江戸まではまだ七八十里ありますよ。いくら走つたところで、そんなに早く行けはしません。馬にでもものつて行つたらどうですか。」

「馬には乗りたいが、錢がたりないのだ。」

「ではお侍さんは、何のためにそんなにいそいで江戸に行くのですか。」

子平は笑ひながら馬子に答へた。

「學問のためだ。」

「へえ、學問といふのは、そんなにいそぐものですか?」

「さうだ。一日早ければ、一日だけよけいに學問ができるぢやないか。」
するとその馬子は大そう感心して、

「それでは賃銀はいりません。この馬を次ぎの宿までお貸ししませう。これにのつておいそぎなさい。そして私の馬は宿場しゆくばにつないでおいして下さい。」

子平は馬子の申し出でにすつかり感じ入つて、

「さうか。それではお前の馬を貸してくれ。」

と、馬子の馬にのつた。そして一と鞭むちあて、先きをいそいだ。次ぎの宿場しゆくばまで走つてくると、馬を預けておいて、そこからさきはまた自分の足で走り始めた。するとまた一人の馬子にであつた。

「お客さん。そんなにいそぐのなら馬を貸しますから、錢百文下さい。」

と、自分のひいてゐる馬を指して、

「今日は一人もお客がないので一文も錢が手に入りません。家には長い間病氣をしてゐる母親がをります。藥を買つてかへらなければなりませんから、どうでせう、百文で私の馬を借りて下さい。」

と、聲をかけた。子平は馬子の顔をみた。馬子は體の弱さうな若者であつた。ただで馬を貸してくれた馬子よりも、むしろこの馬子に子平は同情をして、

「よろしい。それ。」

と、小刀を賣つたお金の中から、百文だけ出して馬子にあたへた。そしてまたその馬にのつてさきをいそいだのである。

そのころの百姓や馬子たちは、人を疑つたり、だましたりするものは至つて少なかつた。だから見知らない貧しさうな旅の武士に、大切な商賣の元手である馬を平氣で貸してよこすのである。子平は馬子たちと一しよに、旅行してゐるやうな氣持

であつた。その時の子平の歌に、

道とほみ獨り旅寢のすべをなみ馬子らと歌ひ歌ひくらしつ

と、いふのがある。

まもなく、橋のない川の岸に出た。その頃はどこの國にもすべて大きな川には橋といふものがなかつた。徳川幕府は橋をかけることを許さなかつたのである。なるだけ江戸にやつてくる道路を不便にして置いて、他の國の大名が萬一不意に江戸に攻めてむことを防がうといふ、狡ずるい考へなのだ。東海道の大井川や、天龍川に橋がなかつたのは、日本人が橋をかける術すべを知らなかつたのではないのである。

同様に仙臺から江戸にいたる途中の川にも、ほとんど橋がなかつた。流れが急なために、雲助が、裸で旅人に向ふ岸へ渡すといふことができず、渡し舟が旅客を運んでゐた。

子平がこちらの岸に着いた時、渡し舟は向ふ岸にゐて船頭の影がみえない。大きな聲でいくら呼んでも、渡し舟はこちらへやつてこないのである。次第に日がくれて、夜に入つた。

子平は、川ぎしの草の中に野宿のじゆくしなければならなかつた。子平は懷から日記帳をとり出して、矢立の筆をぬいた。月の光りに照して、

川のへに待ちをる舟のなにゆゑにこぎて來たらず水のみなざる

と、歌を書いた。この時の子平の日記が今に残つてゐる。それを見ると子平が自分で作つた歌のほかにも、

こひしやこひしや我が故郷ふるさとの柴の庵いはりのなつかしや

と、いふやうな歌や、そのほかいろ／＼な民謡みんやうが書きとめてある。これは子平が江戸まで行く間にさいいた馬子の歌や渡し舟の船頭の歌をそのままうつつしてゐたの

である。しかし、柴の庵がなつかしや、といふ馬子の歌をうつしとつた子平の心は學問のために、はだして江戸に走つて行きながらも、次第に遠くなる故郷をしのぶ深い氣持がこもつてゐるやうに思はれる。

子平の日記には、まだいろんなことが書いてある。たとへば「人參三千本は、三百坪に植ゑることができぬ。」などと書いてある。これは旅行の途々たれかにきいたのか、たれかに以前に聞いたことを思ひ出して書きつけたのかにちがひない。そしてこの人參三千本といふのは、たゞの人參ではなく、煎じてその汁を藥にする朝鮮人參のことなのである。

その頃朝鮮人參は、日本に輸入されて栽培され、藥用に供せられた。子平は多くの人の命を救ふ朝鮮人參の作り方に注意したものにちがひない。

かうして走りながらの苦しい旅行の間にも、子平はさまざまに心を配りながら、

三日目の夕方にはとうとう江戸に走り着いた。普通の入が十數日かゝる道のりを、たつた三日で走り通した子平は、學問のためにはとても意志の強い武士であつたことがわかる。それも、朝鮮人の風俗を實地に見るといふ目的のために、それほどどの勞苦をいとほなかつたのである。

子平は江戸に入つて、朝鮮の使節が、將軍に貢物を獻じ、それから更に江戸を出發して西に歸る行列を十分に見とどけてからまた仙臺に歸つてきたのである。

八、文武大學校の設計

その時代の學問には、朱子學、陽明學などと名づけられる區別があつた。子平はさうした學問は少しも學ばうとはせず、學問の仕方については、

「學問には、朱子流^{しゆ}とか、陽明流とか型にはまつた流儀はいらないもので、たゞ廣く本を読み、日本や支那やその他の國の昔からの歴史をしらべて、政治の仕方がわかれば才智はひとりでに生れてくるのである。」

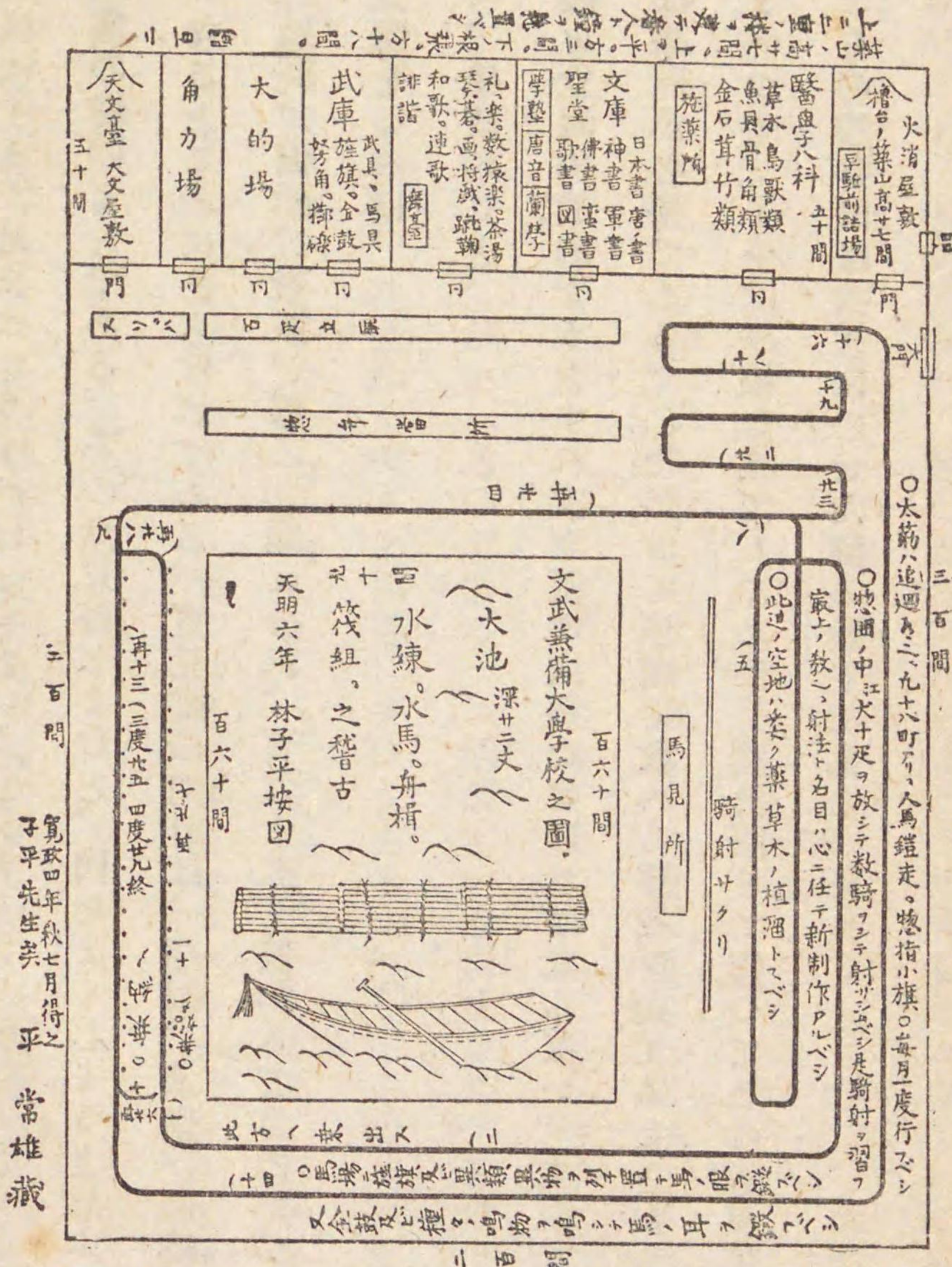
と、いふ意味のことをのべてゐる。勉強して知識が増し才智ができただけではまだほんたうの學問ではない。その才智を使つて國のためになる仕事を働いてこそ學問をしたといふことがいへるのである。「活眼（いきたまなこ）を以て活書（りつばな本）を読み、あまねく天下を周遊（まはりあるき）してその読みえたることを實地に照らし合せて活動（はたらく）せしめざるべからず。」と子平は書いてゐる。そして子平は自分でさういふ風に學問を修めたのである。それは前の「江戸まで走る」話でもわかると思ふ。

子平は、自分のさうした學問の仕方を殿様にすゝめ、役に立つ人間をつくつて國

を立派にするためにはかうすればいゝといふ意見書を書いてさし出した。それは一十八歳の春のことである。その意見書をよむと、國をよくしようと思ふ子平の智恵^{ちゑ}がいたるところにあらはれてゐる。意見書の内容は、學制、武備、制度、法令、賞罰、地利、儉約、章服、雜の九編に分れ、百九十五ヶ條からできあがつてゐる。その大體をいへば、

一、學政のこと。

國を立派に治め^{さむ}ようとするれば立派な人がゐなければならぬ。立派な人をつくるには學問が必要である。したがつて學問を教へる學校を建てるのが大切である。かういつて、子平は學校を建てるために、設計圖まで作つてこの意見書にそへてゐる。その設計圖は次ぎにのせた圖の通りである。



子平の考へ出した文武大學校の圖

子平のこの文武大學校設計圖は寛政四年七月に、版木に彫つて印刷したものをそのまゝ縮寫したものである。少しばかりこの圖面を説明すると、學校の廣さは、三百間と二百間で六萬坪。この大部分が、陸海軍の武術を練習する場所で、今でいへば、陸軍練兵場に、海軍の實習プールを合せたものである。この圖の下の舟の繪の描いてあるところが、そのプールで、廣さは、九十間に百六十間。深さ二丈のプールに水をみたし、水泳術と、水中馬術、船のこぎ方、筏の組み方などを教へるのである。

プールの周圍は馬術を學ぶ馬場である。プールの周圍の太い線は、巾何間かの廻り道で、その長さおよそ十八町、これがすべて陸軍の行軍の練習をする陸軍練兵場になつてゐる。今の練兵場は方形の廣場だが、子平の考へた練兵場は、出發點からぐるぐる廻つてもとへ歸つてくる十八町の廻り道であつて、武士たちが馬に乗つて

鎧を着たり、旗さし物を持つたりして、毎日一回行列をつくり、この廻り道を行軍するのである。そして道路と道路の間の空地は「悉く藥草木の植ゑ溜とすべし。」と、子平は書いてある。藥草や、藥木を植ゑて、それを刈り取つて藥に用ゐるのである。

馬見所といふ字の見える右の方の二本の線は、細い柵でかこはれた道で、この中に、犬十頭を放ち、柵の外から馬に乗つた武士が五、六人、走りながら、犬を射る練習をする場所である。

左の端は一部分は馬場になつてゐる。馬場も普通の馬場ではなく、旗を立てたり、異様なつくり物をおいたりして、馬が戦場で敵の旗や、異様な物を見ても驚かないやうに平常から訓練するやうにし、また、いろ／＼な鳴り物をうち鳴らして馬の耳を音に馴れさせるやうにする方法も、この圖の下の方に書き込んである。

プールの上部の長方形は、上が馬百頭の厩うまや、下は武士たちの食堂である。八つに仕切つてある上の欄らんはそれ／＼みな教室となつてゐる。右の方のはしの門からこの大學校へはいつてくると、そこには、高さ七間の築山があつて、山の上には火の見櫓が立ち、番人がゐて半鐘が備へてある。こゝから校内全體を見張つてゐるのである。

次ぎの廣い一畫は醫學を學ぶ教室で、藥をつくつて人々に與へる場所も設けてある。

その隣は圖書室である。圖書室に備へられる本の種類は、日本の本は、天皇の御事蹟を書いた本をはじめ、佛教の本や文學の本などをそろへ、支那の本も和蘭オランダの本も備へる。圖書室には閲覧室といふよりも、學生たちが勉強する勉強室もつくる。同時に休養といふことも忘れてはならない。子平は圖書室の隣に遊戯室を設けた。

はしの方に舞臺があつて、そこは猿樂さるがくをしたり、蹴毬けまりをしたりするところになつてゐるが、茶の湯や、琴や、碁、將碁、和歌、俳句などまで學んで楽しむことになつてゐる。武士にも、茶の湯や、琴を教へてやさしい心がけを養はせやうと、子平は考へたのである。

その隣は武庫といつて、いろ／＼な武器を入れておく藏くらである。武庫の隣は、弓を射る的場まよばである。そのつぎは角力場すまふ。一番はしが天文臺である。

六萬坪の廣い場所に、陸海軍に文學も加へたかうした學校を建てて、人材を養ふやうにといふ意見を、子平は殿様にさしだしたのである。子平はこの學校を「文武兼備大學校」と名づけた。

しかし、子平のかうした大きな考へ、立派な智慧ちゑも、情けないことに仙臺の殿様には少しもわからなかつたので、全く用ひられずじまつた。

一、武備のこと。

こゝで武備といふのは武士の心がけのことで、平和な時にも戦いくさを忘れず、いざといへばすぐ間にあふやうに平常の備へが大切である。今のやうに武士が武備を忘れてゐては萬一、朝鮮、琉球、蝦夷などから不意に攻めこまれた時には、必ず日本は敗れてしまふから、平常の間に武士や馬を訓練させておかなければならない、と子平は説いてゐる。しかしこれも殿様にはとり上げてもらへなかつた。

一、制度のこと。

そのころ、人々が遊惰いっだに流れて、仕事を忘れ、でたらめが多いので、それを直すために色々な規律を設け、たとへば、家は質素に丈夫に建てるやうにして、無用な飾りかざりはしてはならないといふやうに、きびしくとりしまらなければならぬ。着物は身分に應じてすべて質素なものを着るやうに定め、毎日の食事も、三千石以下の

武士は一汁一菜、それ以上の武士はどんな時にも、一汁二菜をこえてはならない。酒を飲む時のおさかなも三千石以下は一と皿、三千石以上は二た皿、といつても、吸ひ物をつけるときはあとともう一と皿しかつけてはならない。澤山の集りの場合でも、食物と着物の制度は破つてはならない。さういふやうにきびしく實行させることによつて、人々の悪い行ひが、すつかり改まるといふ子平の意見である。

昭和の少國民諸君は、大東亞戦争に打ち勝つて、日本が太平洋を中心として、大きな海洋國家をきづきあげるためには、國民が一身一體となつて、まづ第一に、戦争に必要なものに主力をそぐため、着物や食物に政府が制限を加へて、着物には點數制を行ひ、町の食堂でたべる食物には、晝飯は二圓五十錢、晩飯は五圓をこえてはならないと定められてゐることを知つてゐるであらう。

しかし今から百何十年も前に、林子平はこれと同じことを考へてゐたのである。

けれども、殿様はやはり子平のこのすぐれた考へを用ひようとしなかつた。

一、法令のこと。

法令といふのは、人々に守らせる國の命令を豫めつくつておくことである。人々が好き勝手なことをしては國の規律が亂れるおそれがある。そのために法律が布かれるのである。

子平はたとへば、七、八歳からは本を讀んで勉強するやうに、まる十五、六歳からは武道を學ばねばならない。又すべての武士は、殿様から頂いてゐる祿高ろくたかに相應した武具と馬具を備へる義務のあることを法令によつて定めなければならぬ、と説いてゐる。

又物を賣買する値段を國で定めておき、その定められた値段よりも高く賣ることを許さないやうにするとか、親類だとか、友達が家を建てたり、修繕したりする時

には、お互ひに手傳ひあふことを規則で定めておくとか、武士や町人が、三味線をひき、淨瑠璃などをかたつたりして遊ぶのはやめなければならぬとか、しかし、盲人などが生活のためにさうすることは許しておくとか、たぐさんの例をあげ、これらのことをすべて法律にしておいて、人々に守らせるやうにしなければならぬと説いた。

殿様は子平のこれらの意見のどれ一つをも實行しなかつた。おそらく仙臺の殿様だけでなく、そのころのいかなる大名も又將軍でも、子平の意見のすぐれてゐることなどはわからなかつたであらう。大名は江戸時代に入つては、もはや國をよくして世の中を進歩させる力を失つてゐたのである。

しかし、少國民諸君よ、こゝにのべられてゐる林子平の意見をよくみたまへ。最初の、七、八歳より本を讀んで勉強しなければならないといふことは、明治になつ

て小學校がおかれ、今はそれが國民學校となつて、満六歳から、國民にすべて就學の義務を定められたことを子平はすでに百八十年も前に唱へてゐるのである。

また今はすべてのものに公定價格ができて、それ以上高く賣ることは法律で禁ぜられてゐる。子平は百八十年以前にそれと同じことを、「一錢たりとも、かけ値に仕らずとの儀、仰せいだされ候。」と説いた。親類や、友達の間で生活の助けあひをするやうに、といふ子平の意見は、今日の隣組の制度をもつとはつきり進めた考へである。

一、賞罰のこと。

人民のうち、善いことをしたものはこれを褒めて褒美を與へる。よくないことをしたものは罰するやうにして、例へば、武士が武藝を怠つたり、町人が家業を怠けたときなどは、必ず罰しなければいけない。かうして、はつきりと賞罰を實行しな

いと、法令を出しても行はれず、したがつて國が亂れてしまふ、と子平はのべた。今日でも法律にはそれを犯すと罰せられる規則が設けられてゐる。子平の考へはやはり早かつたのである。

一、地利のこと。

地利とは、地理のことではない。それ〴〵の土地にできる産物を、互ひに交易することや、その土地々々に適する産物を工夫してつくり出すことや、田や畑を開き、海や河の産物も澤山とする仕方を工夫することなどをいふのである。いひかへると産業開發のことである。子平はその上に産業の増進に必要な牛や馬の育て方もこゝで説いてゐる。

一、儉約のこと。

儉とは、奢りを知らざること、約は、つゝましかかにして、だらしないことをしないことである。つまり無駄をしないことである。しかし、なすべきことをやらないのは儉約ではない。それは、けちんぼうのことである。もし無駄にお金や物を費す人があれば、それはだらしない人で、儉約をわきまへない人であるが、世の中のためや國のためにとても必要だと思ふ時に一時にお金や物を費すことは儉約の結果である。ふだんの無用の時に物を費さないだけではまだほんたうの儉約ではない。有用のときに一時にどつと使ふために平生の儉約が大切なのである。一家でもやはりこの通りだが、一國もやはりこの通りでなければならぬ。これが富國強兵の基である。——かういつて子平は儉約の仕方を、こま〴〵とくはしく書いてある。

一、章服のこと。

章服の章といふのは、着物の綾模様あやもようのことである。服は着物のことである。身分

に應じて、どのやうな綾模様の着物を着ていゝか、どんな着物をつくればいゝかといふことを、子平はこゝに説いてゐる。そしてその精神は無駄を省き儉約を尙ぶのにあつた。

一、雜。

九ヶ條の中の最後の雜の部に、子平はかういふ意味のことを書いてゐる。

「天子さまがおかくれになつたのちのお名前には、院といふ字をおつけあそばす。ところが、武士や町人もやはり勝手に自分の戒名に院の字を使つてゐる。これほど不敬なことはない。これからは仙臺藩だけでも決して戒名に院の字を使はないやうにしなければ天子様におそれおほい。」

こゝには、子平の朝廷に對する尊崇の念があらはれてゐる。勤皇家の藤塚式部と交はつてゐる間に、子平の心には朝廷と臣民の區別を明かにして、天子様を崇めな

ければならないといふ考へがおこつたのである。

そしてこの意見書はすべてで四萬字に達する長いものである。子平はこれを自分の仕へてゐる仙臺の殿様にさし出したのであるが、今いふ通り、少しもとりあげてもらへなかつた。

子平はがっかりしてしまつた。けれども、そのために勇氣がくじけてしまひはしなかつた。さらに發奮して、この上は仙臺一國のことよりも、もつと大きな、日本の國全體の役に立つ働きをしなければならぬ、と心に誓つた。そして二年たつて三十歳の六月、子平は江戸に出てきた。

妹がお嫁に行つてゐる飯田町の牛塚市郎左衛門といふ火消し與力といふ役をつとめてゐる親類の家にとめてもらつた。この年、父の笠翁と姉の奈與なよが世を去つた。

子平はそのまゝ、五年の間江戸にゐた。その間に、子平は工藤平助や桂川甫周のや

うな人々と交はりを結んで、一所懸命に學問をはげんだ。工藤平助のことは前にのべたが、桂川甫周は將軍の侍醫をつとめてゐる名高い外科醫で、蘭學に通じ、世界の事情にも明るかつた。

この二人は子平のためには先生であつたが、學問の上では子平の獨創（ひとり工夫する）は、はるかに二人をこえてゐたので、二人の方でも子平を大切に思つて、その志を助け、はげましたのである。

その内に明和八年となつた。子平は三十四歳である。阿波の沿岸に一隻のロシアの船が流れ着いた。幕府がこれを取り調べると、乗組員の口から、ロシアが日本の蝦夷を侵略する準備をしてゐるといふことがわかつた。

當時ロシアの皇帝はカザリン二世といふ女帝であつた。カザリン二世は大そう志の大きい女帝で、トルコと戦つて勝ち、シベリアを征服してその勢力を支那や日本に

も及ぼさうと企てゝゐた。そのために、女帝は兵をカムチャツカにまですゝめて千島へはいる折りをねらつてゐるのだ、といふことが傳はつてきた。

このことを洩れきいた子平はもはやぢつとしてはゐられなかつた。自分の憂へてゐたことが、事實となつて眼の前にはれてきたのだ。舉國一致の力で國を守り、敵を防がなければならぬ。しかし、國を守るにしても、ロシアが攻めこんでくるかもしれない蝦夷や千島の地理は、日本にまだよく知られてゐないではないか。そんなことでどうして敵を防ぐことができよう。

子平は一人で決心した。だれもが知らない間に、ひそかに蝦夷に渡つて、その地勢や風俗を自分でしらべてこよう。自分が今まで學問にはげんだのは、かういふ時に國家の役に立ちたいためだ。さう心に定めた子平は、三十五歳となつた安永元年、蝦夷探檢に赴くために、まづ江戸を立つて仙臺にかへつてきた。

九、「三國通覽圖説」

仙臺にかへつた子平は、だれにもかくして蝦夷探検の準備をするために、兄の家に居ては工合が悪いので、ひとりで小さな家を借りて住んだ。

子平のその家は一と間しかなかつた。そこで、子平はひそかに江戸で手に入れて持ちかへつた古い不完全な蝦夷地圖をしらべたり、工藤平助の「赤蝦夷風説考」をよみかへしたり、新井白石の「蝦夷志」をしらべたり、測量の器械をつくつたりして日をすごした。

ある日、兄の嘉膳は子平が一人で何をしてゐるのだらうと思つて來てみると、子平は留守で部屋の中には机と、その上に十冊ばかりの書物とが置いてあり、片隅に

は一と組の蒲團の折りたゝんだのと、縁側には飯を焚く釜が出してある——その外には何にもなかつた。

その蒲團は兄からもらつたもの、釜は友達の藤塚式部から借りたものである。蝦夷行きの準備に關係のあるものはだれの眼にもふれないやうに、どこかへかくしてしまつてあつたので、嘉膳も少しも氣がつかなかつた。

嘉膳がしばらく待つてゐると、子平がどこからかかへつてきた。

「おう、これは兄上でしたか。私は今度少し遠い島まで出かけますので、今鹽釜まで行つて、それとなく藤塚式部にも別れをつけてきました。この蒲團は兄上におかへしいたします。あの本と釜はあとで式部のところへ、かへしておいて下さい。かへつてきたら、又借していただきますから。」

嘉膳はおどろいて、

「子平、一體どこへ行くのだ？ 遠い島といふのは、どこのことだ？」

「はゝゝゝ。ついそこの金華山沖の無人島です。どうか、心配しないで下さう。」

と、子平は兄にも又友達の藤塚式部にも自分の目的をうちあけなかつた。萬一、蝦夷へ行つたことがばれて幕府から罪を得た時、兄や友達を巻きぞへにしたくなかつたからである。

別れのために、式部にあてて書いた子平の手紙が今にのこつてゐる。

「又遠島邊へ渡り候に付、借用の書ども、鍋と一同に返還仕候、歸仙後又々借用仕候。」

かうして子平は仙臺を立つてひそかに蝦夷に赴いた。多分千島に近い東蝦夷の沿岸を巡視し、つぶさに地勢を測り、アイヌ人の生活をよくしらべ、ロシア人來攻の形勢も探索してかへつたのにちがひない。今日林子平が蝦夷を探検したことを證據

だてる史料は何にもこのつてゐない。

しかし、子平は探検の結果を基もととしてやがて「三國通覽圖說」といふ本を著はしたのである。この書を見ると子平の蝦夷探検のあとがあり／＼とうかゞへる。

三國とは朝鮮、琉球、蝦夷のことである。この三國の地理や風俗をわかりやすく書いた子平の「三國通覽圖說」は忽ち世にもてはやされ、後には京都においてなる光格天皇の叡覽にも入つて、この上もない名譽の著書となつたが、子平がこの本を著はした目的は、いふまでもなく交易や殖産をすゝめるためでなく、ロシアの來攻にそなへて蝦夷の地理をあらかじめ日本の武士に知らせておきたいといふのにあつた。一しよに朝鮮と琉球の地理歴史をも説き、併せて「三國通覽圖說」と題したのである。そしてこの本には三國の地圖がそへてある。また小笠原諸島の圖もついでゐる。ここにのせたのはその四つの圖を一しよにしたもので、地圖には小笠原諸

子平のつくつた三國地圖

この地圖は二頁つゞきのま
まで、本を横にしてごらん下
さい。すぐこの下の日本地圖
は琉球がずるぶん大きく、無
人島とあるのはあとで子平が
手柄をたてたことになつた小
笠原島です。

又七三頁の地圖は北海道で
す。ガラフトが半島となり、
千島も北海道もめちや／＼な
のは、それほどこの時代には
まだこのあたりの地理が知れ
てゐなかつたからです。



(鈴木省三氏著「林子平傳記」より複寫)

島のことを「無人島」と書いて、實際よりも大きくしてしまつてあるが、「三國通覽圖説」の卷末をみると「コノ島本名小笠原嶋トイエドモ世アゲテ無人嶋ト稱スル故、稱ニ隨テ無人嶋トアラハスナリ。小笠原嶋と名ヅケシコトハ昔時、小笠原某、コノ嶋ヲ見出シテ地圖ヲ持テ歸リシ故、名付ケシナリ。」とことわつて「無人嶋ハ伊豆ノ辰巳二百七十里ニアリ。」とその位置を示し、各島の大きさや産物や住民の有無をのべた上、延寶三年嶋谷市左衛門、中尾庄左衛門、嶋谷太左衛門以下三十人あまりが探檢に出かけ、くはしくみとゞけてきたといふことを書いてゐる。

子平がかうして「三國通覽圖説」に小笠原嶋のことを書いておいたために、あとでこの島がアメリカに占領された時、「三國通覽圖説」の記事が證據になつて、日本の領地だといふことがわかり、とりかへすことができた。「三國通覽圖説」はさういふ大きな手柄をのこした書物なのがある。

そしてこの小笠原島の地圖は、探檢に行つた嶋谷の家に藏されてゐた地圖をもととして子平がつくつたもので、又朝鮮の地圖は、朝鮮に傳はつてゐるものと、長崎の和蘭學者檣林家に祕藏してゐた地圖とを比べ合せて作つたもの、琉球の地圖は、「中山傳信録」といふ本から取つたものとそれごとくことわつてゐる。

ところが蝦夷の地圖は昔から自分の持つてゐたのを使つたと書いてあるだけでその出所が明かでない。そして、「三國通覽圖説」の内容をみると、朝鮮の事はごく簡単に書き、琉球の事は、「中山傳信録」といふ書物から寫したために朝鮮よりも少し精しく書いてあるが、蝦夷のことは全體の三分の二にも當るほどとても精しく書いてある。そして書いてあることも正確である。これは子平が自分で蝦夷を實地に探檢してきた證據である上に、ロシアの來攻にそなへるのが子平の何よりの目的であつた證據でもある。又子平は蝦夷のことは長崎で和蘭人アーレン・ヘイトからさい

たことわつてゐるが、多分さういふ風にいふことによつて、自分が蝦夷探検におもひいたことをかくしたのであらう。

かやうに、子平が地理學者として、國防學者として、蝦夷探検中にどのやうな研究をしてきたかは「三國通覽圖説」に明かにされてゐるのである。それでこの本の蝦夷の部分も、子平がどんなに書いてあるかを少しばかりしらべてみよう。

はじめに蝦夷の位置がのべてある。

「奥州ノ北ニアリテ津輕ノ龍飛崎たつひ、南部ノ大間ヶ嶽等ヨリタゞ一條ノ海水ヲヘ

ダテルノミナリ。」

と、本州からの方角を示し、次ぎにその國は、「オヨソ四十三度より五十一、二度ニカカツテ大寒地ナリ。南北三百里東西百里バカリノ國ナリ。シカレドモ東西ハ屈曲(海岸線)廣狹(地勢)一ナラズ。石狩、イブツノトコロニテハ、ワヅカニ二十四

五里ニクビレルナリ。」

と、大體の地勢を説いてゐる。次ぎに蝦夷全體が五つに區分せられてゐることや一區域内にある村の數などをしるし、村や港で行はれてゐる賣買の仕方や商人の習慣や、産物の種類や、「お味方蝦夷」といつて松前藩に歸服してゐるアイヌ人たちがゐる新年には松前の殿様のところへ挨拶にくるといふことや、人智の發達の程度などを書いてある。

すなはちアイヌ人は全く文字を知らないこと、通貨もなく、穀物のつくり方も知らず、着る着物もなく、銅や鐵を造るすべはもとより知らず、たゞ魚をとつたり、獸を狩つて、それを食つて生きてゐるだけだといふことや、藥といふものがなく病氣になればお祈りをするだけだが、どういふ神様に祈つてゐるのか、アイヌ人自身もよく知らず、たゞ天に祈つてゐるだけだ、と書いてある。

そして、子平はかうつけ加へてゐる。

「小子（自分のこと）按ズルニ（考ヘルニ）タエテ醫藥ナシトイフニモアラズ、イケマ、エブリコノ二藥ヲ以テ腹痛、切疵ヲ療スルコトアリトイフ。」

次にアイヌ人の服装については、

「ソノ國（蝦夷のこと）木棉、純帛ナシ。ソノ服ハ、アツシトイヒテ藤蔓ノ如キ物ノ皮ヲ剥ギテ粗ク織リテ用ユ。ソノ織面ハ蕙ノ如クソノ形、腰ト等シクシテ筒袖ナリ。コレヲ十徳トイフ。コノ物ノミ蝦夷ノ産服（蝦夷でできる）ナリ。コノ外ハ獸皮ヲ用ユ。又近年本邦及ビ唐山（支那）滿洲、莫斯科未亞（ロシア）ナドノ古手（古イキモノ）ヲ渡シテ服サシム。然ルユエニ一家ノ内ニテモ父子兄弟ソノ服ヲ異ニスル者アリ。親ハ日本ノ服ヲ着テ、子ハアツシヲ服シ、妻ハ唐山ノ服ニテ、娘ハ莫斯科未亞人ノ如クナル者アリトイヘリ。」

これは多分、子平が實際に見てきたことにちがひない。

地勢について、

「ソノ國體（地勢のこと）ヲ一句ニ言ヘバ百里ニ三百里バカリノ一大石山ナリ。シカルユエニ地面コトゴトク嶮岨（けはしい）ニシテ中土ニ樹藝（植林、栽培等）ヲナスベキ耕地ナシ。コノユエニタゞ海岸ニソヒテ、ワヅカニ百七ヶ村アルノミナリ。」

かうその頃の北海道本島の特長を書いたあとで、

「蝦夷國ノ北ニ又一國アリ。蝦夷ノ西北界ヨリワヅカニ海上六里ヲ隔ツ。コノ地ヲカラフト島トイフ。」

と、樺太のことを傳へてゐるが、こゝで子平は樺太が島でなくアジア大陸の半島だといふことをのべてゐる。この時代にはまだ樺太がアジア大陸から離れた島であ

るといふことを、世界のだれもが知らなかつたのだ。それを発見したのは子平のあとから出てきた間宮林藏であつた。

その以前の樺太地圖はみな大陸の半島になつてゐるが、子平のつくつた地圖もやはり樺太が沿海州についてゐる（七三頁をみよ。）

それから千島のことを子平は書いてゐる。

「蝦夷ノ東海中ニ千島ト稱シテ圖書ニ載ルモノ三十七島アリ。コノ中ニ蝦夷ト通ズルモノタダ二ツ。曰ク、クナシリ、曰ク、エドロフナリ。」

と、正しく記し、ついで

「コノ三十七島ヲ過ギテ東ニマタ國アリ。加模西葛杜加カムシカッタカ（カムチャツカのこと）トイフ。コレマタ韃靼だつたんノ地續キニテ蝦夷國ノ北ヲ取り卷キテ東へ延ビタル遠地ナリ。」

と、カムチャツカ半島にもいひ及んでゐる。そしてカムチャツカの歴史については

「日本寛文ノ頃、歐羅巴洲莫斯歌未亞モスコウビヤノ女帝大豪傑ガウケツニシテ五世界ニ一帝タラント志ヲ振ヒ起シ、制ヲ定メ命ヲ下シテ曰ク、吾ヨリ後、子々孫々我が制ヲ改メズ、土地ヲ廣クシ、功ヲ大ニスルヲ以テ帝業トセヨ、トナリ。ソレヨリ日々月々ニ人材ヲ舉用あひもちヒテ次第ニ韃靼ノ北邊ヲ略シテ、終つひニ日本元文ノ頃迄ニ東ノ限り加模西葛杜加ノ岬マデ、日本道三千餘里ヲ莫斯歌未亞ノ領國ト爲なテカノ國ヨリ代官ヲ置キテ國事ヲ勤メシムルナリ。」

と、明和八年阿波に漂着したロシアの船の乗組員が洩らしたといふカザリン女帝の野心の實際を、その後の子平がかういふ風にロシアの歴史のあとについて研究してゐる。そして子平はそのあとでかういつてゐる。

「コノ加模西葛杜加ヨリ東ニハ略スベキ土地ナシ。故ニ又西ニ顧ミテカノ千島

る、とのべてゐる。

さらに砂金が出る土地も多く、これらの砂金は川に流れ出るばかりでなく、ハポロといふところでは、砂金が海底からもうちあがるらしく、西北風がひどく吹いたあとでは、濱邊四十里の間が、一帯に金色に光る、とのべて、

「コレヲノ金銀ヲ取ラズシテ空シク捨テ置クコト惜シム可キコトナリ。ヒソカニ憶フ、我取ラズンバ後世必ず莫斯歌未亞取ルベシ。莫斯歌未亞スデニ是ヲ取ラバ、臍ヲ嚙ムトモ遅カルベキカ。」

と、子平は蝦夷の金を日本で採掘しなければ今にロシアにとられてしまふと、國の利益を憂へてゐる。そしてその頃日本の一部にあつた蝦夷の金はとても取れないといふ考へを駁して、

「或説ニ砂金ヲ取ランコトヲ欲シテ、ハポロニ冬ゴモリナドスレバ極寒ニ撃タ

レテ必ず死ス。タトヒ死セズトモ病身癡人トナルユエ行ク人ナシトイヒ傳フ。

小子按ズルニ（子平が考へるのに）ソノコト實ナラバ無術無謀ノ甚シキナリ。

ハポロニテ寒氣ノタメニ人死スルナラバ、ハポロヨリ北方ノ人ハ何ヲ以テカ活キルコトヲ得ベキヤ。ソノ寒氣ノタメニ人死スルトイフハ暖地ノ人強寒地ニ入リテ、アラカジメ寒氣ヲ防ガザル故ナリ。防グ術アラバ何ノ死ストイフコトカアラン、思フベシ。」

と、教へてゐるのである。

子平はさらにすゝんで蝦夷の國には、蝦夷松、五葉松等の材木が澤山あることを述べて、熊はゐるが、馬はほとんどゐないことや、ラッコ、オットセイ、アシカ、アザラシなどの海獣が多いことや、鳥類には鷹、鷲、鳶などがゐて、その羽毛がみな立派な矢の羽根になると書いてある。魚類では鮭、鯡が蝦夷の主産物で、アイヌ人

はこれを常食としてゐる。夏七、八月には鮭が河を溯るために、河が鮭によつて埋もれ、水が動かなくなつて、人は手でいくらでも鮭を獲るといふことや、鯨が海に集つてくると、海の上は雪が積んだやうになり、網あみでとれば山のやうな漁獲があることやこの鯨の子を取つて數の子にすることや、その他海鼠なまこや鮑あはひなどもとれるといふこともをしへ、鯨も澤山ゐるが、アイヌ人はまだ鯨を取る術を知らないなど、産物のことをかなりくはしくのべてゐる。

「三國通覽圖説」の中にはこのやうに蝦夷のことをもつともくはしく書いてゐるが最後に、子平は結論として、かういふことをいつてゐる。その意味をかいつまんでいへば、

「アイヌ人も同じ人類である。今は文化もなく、まるで野蠻人の生活をしてゐるが、文明人である日本も支那も和蘭も朝鮮も、何千年の昔は皆今のアイヌのやうなものであつたのである。それをすぐれた智慧や知識のある人が次ぎ／＼にあらはれて數千年の間、間斷なく教化につとめたためにそれ／＼文明國となつたのである。蝦夷にももしアイヌ人の中から大智の人が出て教化したならば次第に文明に近づくことはまちがひないと思ふ。しかし、不幸にして昔から今まで蝦夷から立派な人が出たことを聞かないから、これからさきも立派な人が出る望みはないかも知れない。それだから隣國である日本から、人をやつてアイヌ人を教へ、産業を開き、助けてやるのが當然である。ことに蝦夷は日本に近く、アイヌ人は大そう日本を尊信してゐるのだから、我國から教へ諭せば必ず日本人同様になれるにちがひない。自分が長崎に行つて和蘭人へイトに逢つた時にも『蝦夷はわづかに日本と一筋の海をへだててゐるだけで、日本から行つてなづけければ、アイヌ人は必ず日本に信服するであらう。日本がそれをしなければロシアが必ずアイヌ人を手なづけて蝦夷の國をとつて

しまふであらう。』と語つた。ことにヘイトの意見として『寒い北の方から暖い南の方の國へ攻めこんでくるのは自然の勢ひで、進めば進むほど氣候も暖かに産物も豊かになるからである。しかし、南から北へ進めば、次第に寒くなり、産物も乏しくなるので容易ではない。地形からいへば、ロシアが南下して、蝦夷にくることは自然の勢ひである。』といふことをきいたが、そのとほりだと思ふから早くロシアを防がなければ、日本は今に蝦夷をロシアに取られるにちがひない。』と、いつてゐる。こゝには子平の力強い愛國の精神がよくあらはれてゐる。そしてこの意見を述べるのが、「三國通覽圖說」を著はした子平の目的であつた。では最後に子平が自分で書いて「三國通覽圖說」の附録にかゝげたいろくなさを諸君のごらんに入れよう。

これらの繪はきつと子平が探檢旅行の間にスケッチしてきたものにちがひない。



支那から輸入されたアイヌ人の男のはれ着で日本内地ではこれを蝦夷錦とよんでゐる。

九、「三國通覽圖說」



アイヌ人の女の衣裳で、やはり支那から渡つたもの。

八九



アイヌの酋長である。かたはらに、弓とともに
いてあるかぶり物はロシアのもの、着物は支那の
もの、刀は日本のものといふやうに三箇國のも
のを身につけてゐる。

上流のアイヌ婦人の風俗である。頬には草の花
や破れた格子のいれずみをし、唇にも青くいれ
ずみを施す。この女の着物もエゾのものでなく
日本や支那のものである。

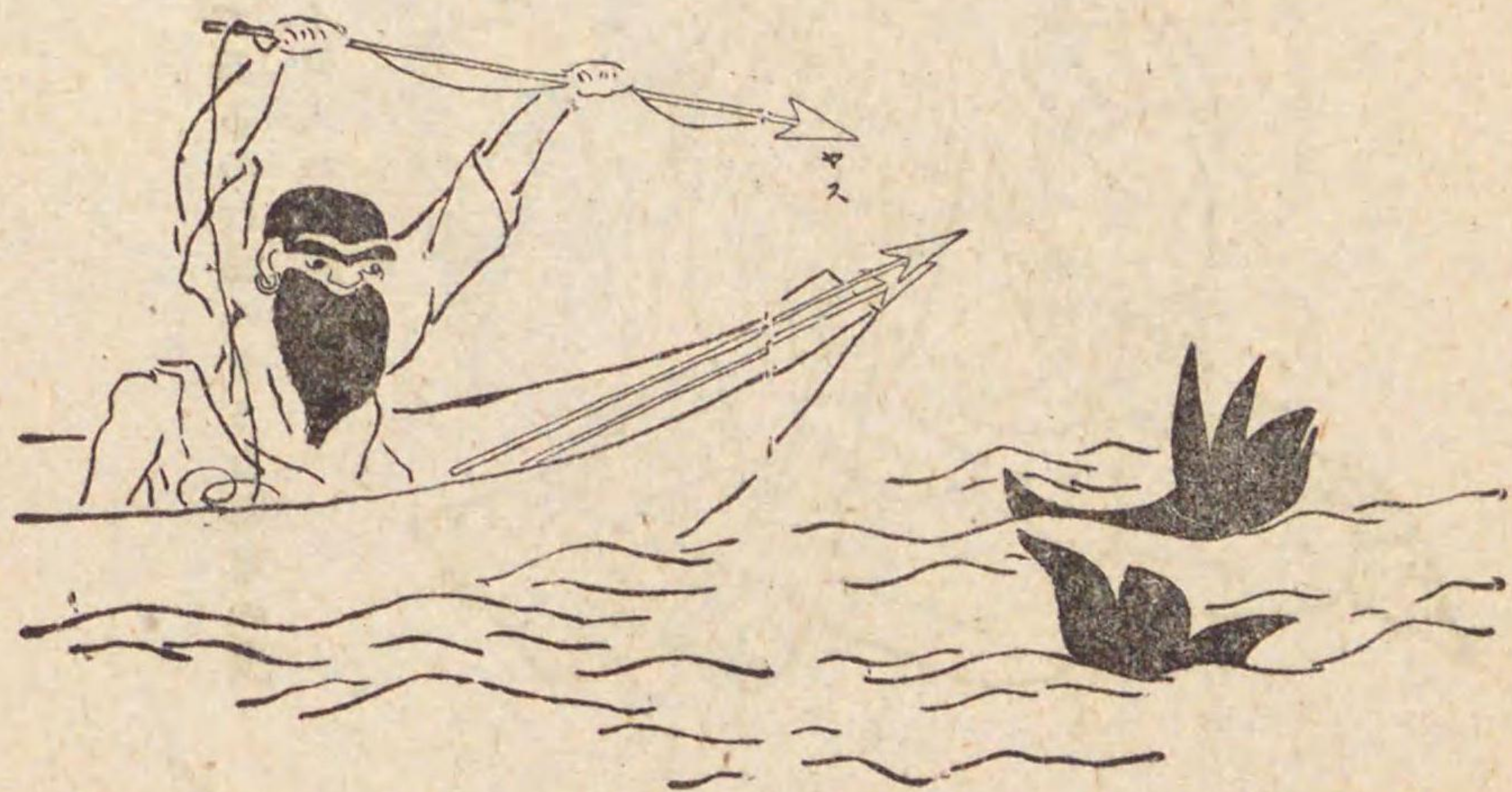


この女の着てゐるのは藤のやうな蔓草の皮
で織つたアイヌ人の衣服である。

これは下層階級の男と女とである。雪帽子
をかぶり、毛皮を着てゐる。刀は白鞘に櫻
の皮を巻き、タシロ或はマキリとよび皆日
本から渡つたものである。



上は下層のアイヌ人の女が鮭を背負つて運ぶところ。
下はアイヌ人の男がヤスをもつてオットセイを突いてゐる圖。



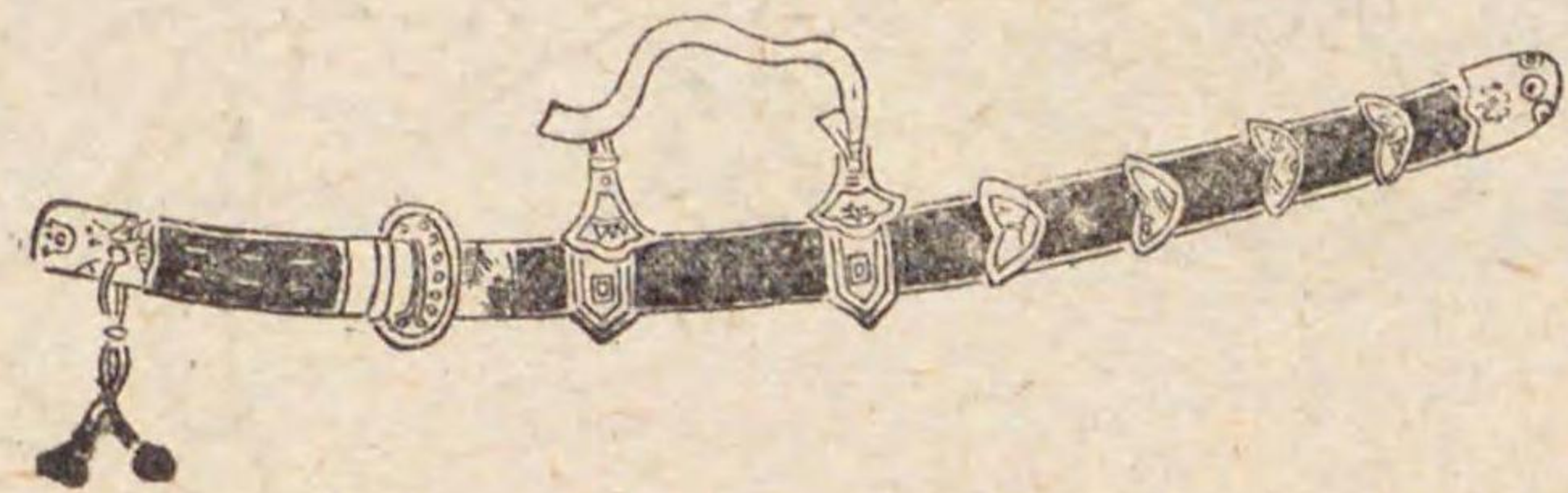
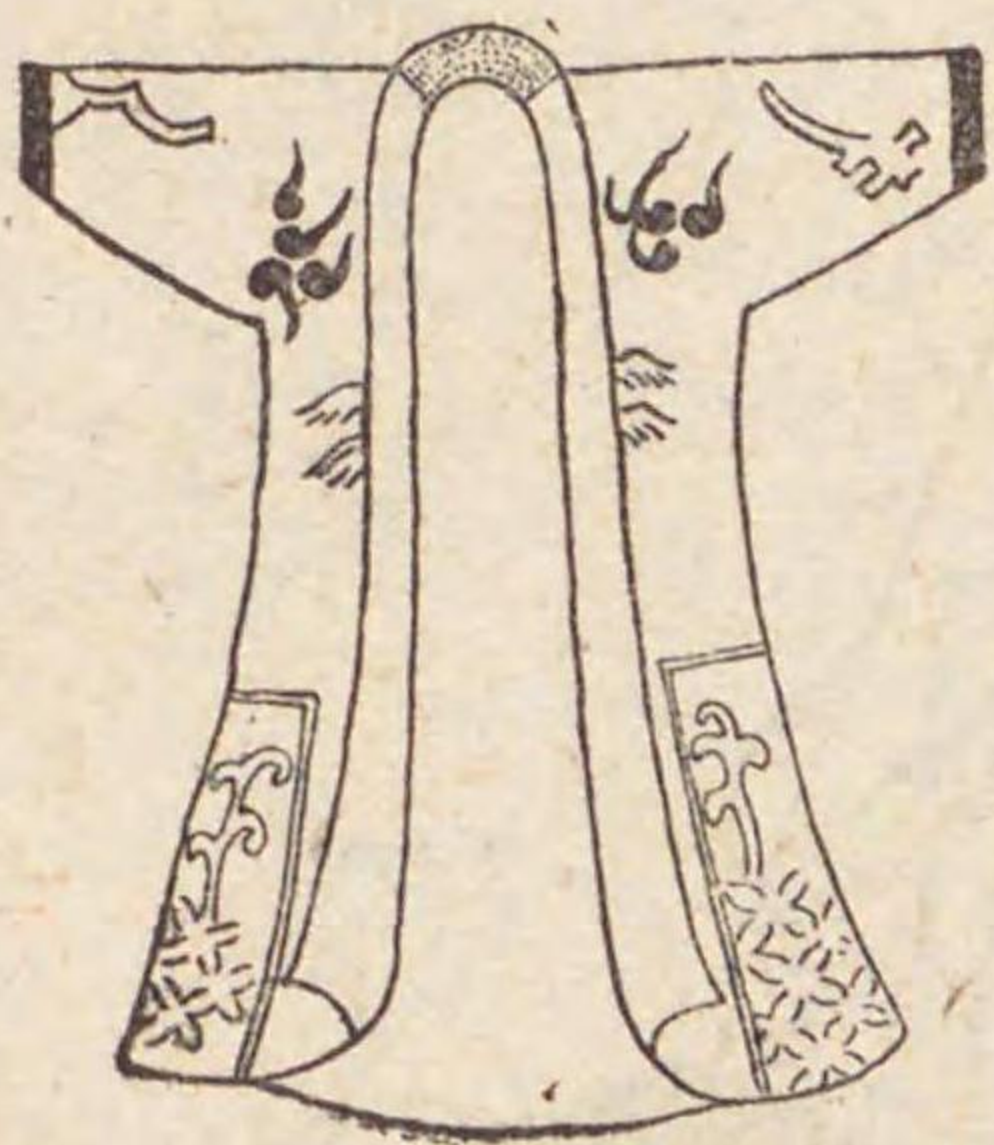
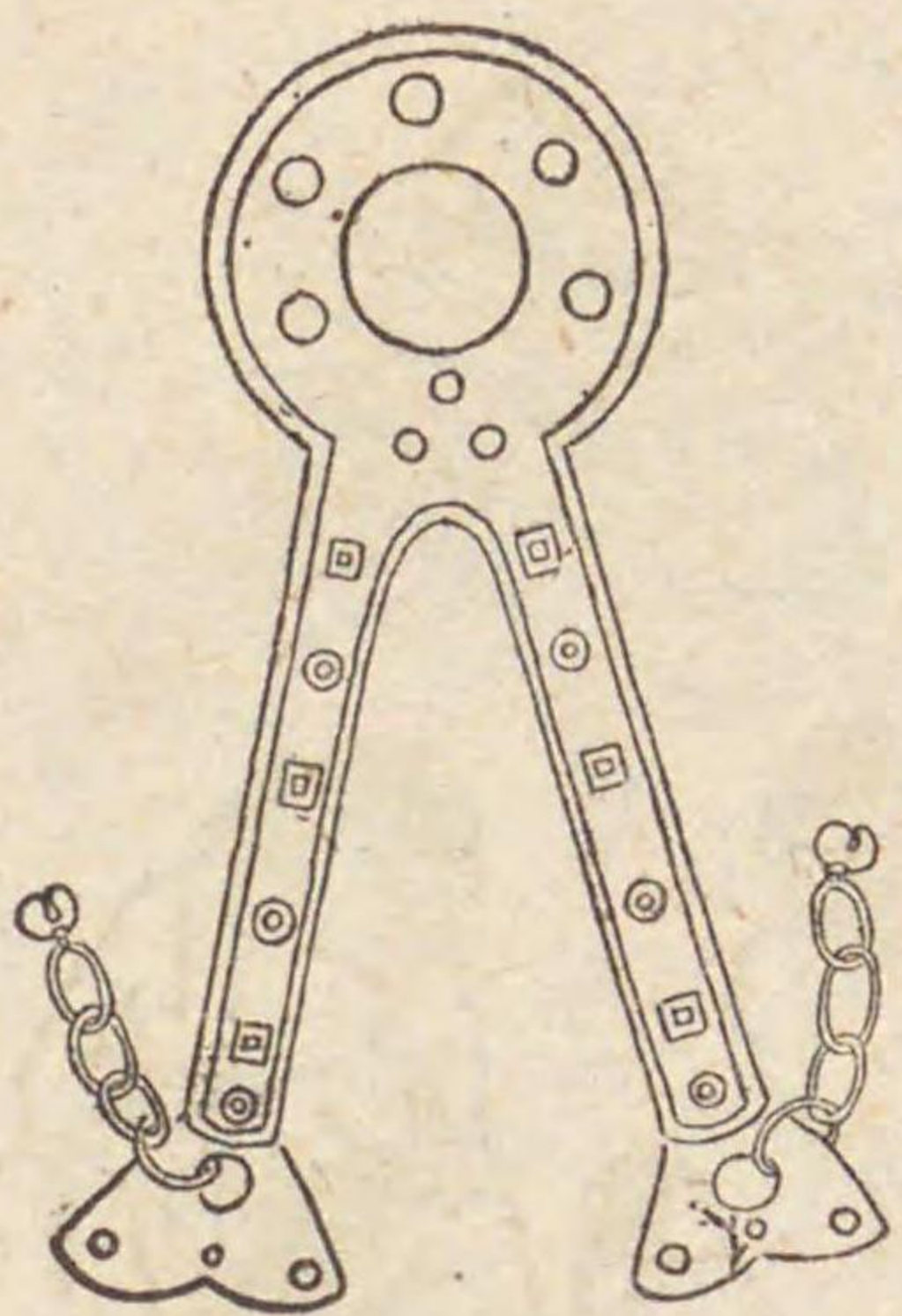
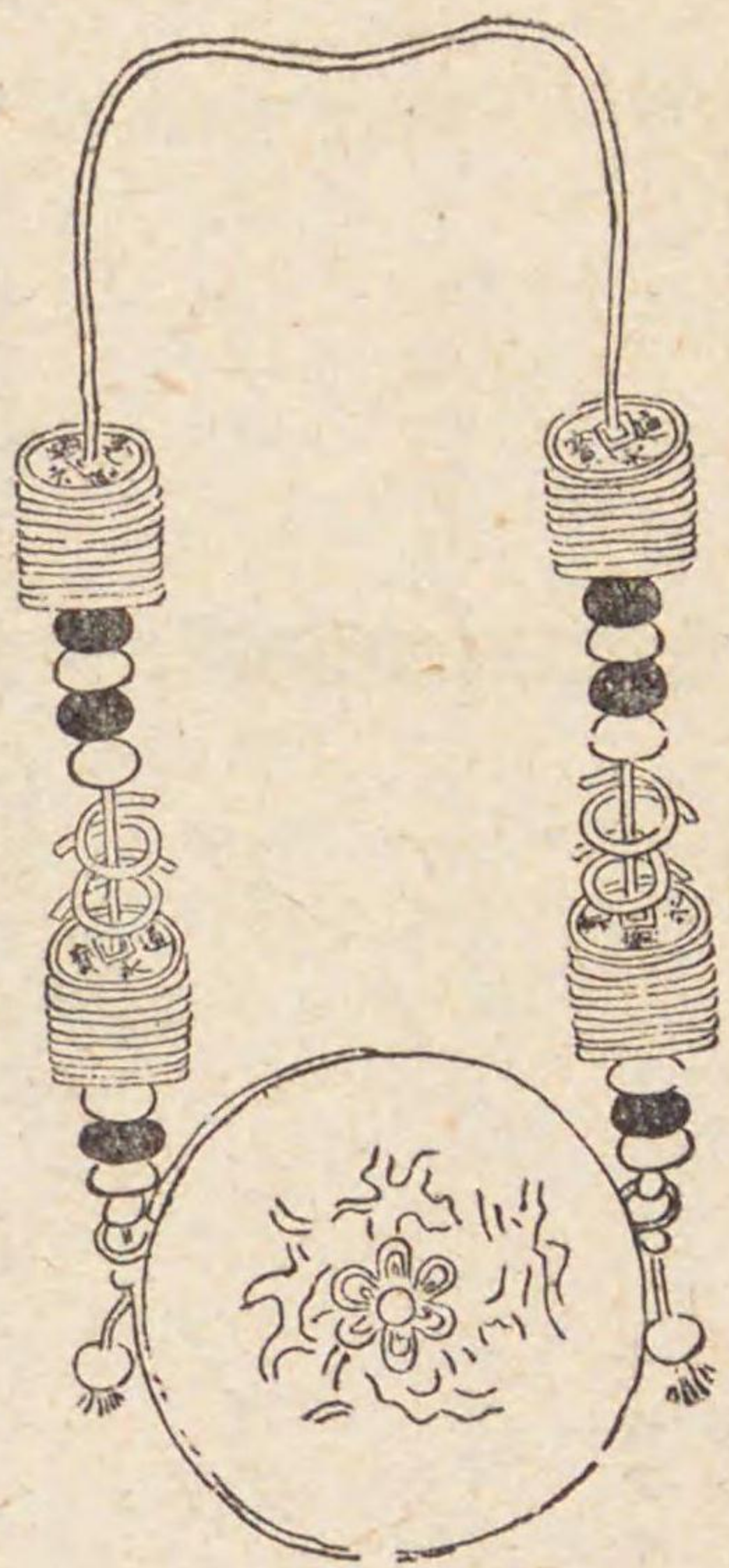
九、「三國通覽圖説」

上はアイヌ人の家庭。石でおもしをしてあるのは鶯などを飼つてある籠である。子熊も飼つて、人の乳をのませる。



アイヌ人の子供が弓を射ることを習つてゐる。

上の右はシトキといひ、アイヌ人の女が首にかけるお守り袋である。上左はクワサキといつて病人の枕もとに置いて祈禱に用ひる眞鍮製のかざり物。その下は、アイヌ人の着るアツシで模様のあるのは男に限つてゐる。一番下はエゾ太刀である。



十、世界地圖を見て

こゝにちよつとことわつておきたいのは、「三國通覽圖説」は子平が蝦夷探検からかへつてすぐに著はしたのではないことである。あとでのべるとほり「三國通覽圖説」は子平が一生の大著述である「海國兵談」をなぜ著はすかといふことを、人々によくわからせるため、そのさきぶれとして書いたものである。これより先き子平は安永四年、三十八歳の時、和蘭の學問を學び、世界の形勢を知りたいと思つて、長崎へ出發した。

しかし長崎へ行くといつても、貧乏な子平にはお金がなかつたので、馬にも乗らず友達布施大橋と一しよに、江戸から長崎まで、三百里の道のりを歩いて行つた。

子平は行李を一つ腰に結びつけ、下駄をはいて箱根山を越えた。關所の役人は、怪しげな旅の武士を呼びとめた。

「どこの生れで、名は何といふか？ 關所札を出して見せろ。」

子平は笑つて、

「私は天下の浪人で生れた國もわかりません。だから關所札も持つてゐません。名前は天逆鉾右衛門といひます。」

と、子平が答へると友達の布施大橋も進み出て、

「私は猿田彦右衛門です。」

と、大聲にどなつた。關所の役人は二人の勢ひに恐れられたのか、それとも大したものではないと思つたのか黙つて關所を通してくれた。かうして子平は遠い長崎まで歩いて行つたのである。

長崎につくと、子平は江戸を出る時、工藤平助からもらつた紹介の手紙を持つて、通詞役人松村世綱を訪ねた。

松村は子平が世界のありさまを學びたいといふのをきいて、自分が和蘭人から手に入れて祕藏してゐる世界全圖をとり出してみせてくれた。それは東半球と西半球に分けた二枚の地圖であつた。子平はその時までまだ世界全圖を見たことがなかつた。蝦夷や琉球や朝鮮がどこにあるかはほゞ知つてゐたが、子平がそれまでモスカウビイヤと呼んでゐたロシアが、どんなに大きな國であるかといふことや、日本よりも小さなイギリスが遠く東洋にまで力を延ばしてきて印度をはじめ南洋の島々をその手にをさめてゐることも、アフリカ大陸がほとんどイギリスの勢力にいつてしまつたことや、更に西半球では、太平洋をへだてた日本の向ふにアメリカ大陸が北アメリカと南アメリカの二つに分れて存在してゐることなどが、すべてこの世界

全圖を見てはじめてわかつた。

世界がどんなに広いものであるかに眼をみはつた子平は、地圖のそちらこちらを眺めまはしてこの世界のどこに日本の國があるのかを探しあてようとしたが、日本はどこにあるのかすぐにはわからない。

「これが日本です。」

と、松村にさし示された日本の位置を見た子平は、あつと聲を立てて驚いた。

「これが日本？ たつたこの小さな島が？」

と、つぶやいたまゝ子平は深い／＼溜息をついた。自分達の生れた尊い日本の國がこんなにも小さな國であることが、子平にはとても心細かつた。子平が力を落してゐるのをみて、松村がいつた。

「林さん、あなたの心持はよくわかります。しかし、このイギリスをごらん下さい。」

イギリス本國は日本よりも狭い。またこのオランダをごらん下さい。和蘭本國は更にイギリスよりも小さいのです。それでも、和蘭人は遠くアフリカ大陸を廻り、南洋にまでやつてきて、そこを自分の國の領土とした上、南洋の富を本國へ運びかへるのです。近頃になつてイギリスが和蘭を押しつけて南洋の國々を奪ひとり、今は支那にまで手を延ばさうとしてゐるのです。それに比べて支那をごらん下さい。またこのアフリカをごらん下さい。オーストラリアをごらん下さい。印度はどうですか？

それ／＼國はとても大きいのに、イギリスや和蘭に自由にされてしまつてゐるではありませんか。國の小さいのは憂へるにはあたりません。いかにして國民の勇氣を振ひおこし、國力を盛んにして海外に發展するかといふことが大切だと思ひます。」

子平の顔は晴れやかになつた。

「さうです。松村先生。あなたのあつしやるとほりです。私はこの小さな日本國が、

和蘭やイギリスにまけない強い國になつて、國威を海外にかゝやかすためにはどうすればいゝかを工夫いたします。日本は海國です。この海國を守る道と、興す道とを明かにして國につくします。」

と、子平は松村世綱の手を握つて力強く答へた。この時から子平は「海國兵談」の著述を思ひたつたにちがひない。

しかし、この最初の長崎留學では、子平はまだ和蘭人へイトや通詞もときえいのしん本木榮之進と知り合ひにはならなかつた。そして滞在の期間も長くはなかつた。子平の海外研究が大いに進んだのは翌々年、二度目に子平が長崎へきてからのことであつた。

十一、アーレン・ヘイト

翌々年は安永六年である。子平はもう四十歳になつた。しかし、「三國通覽圖説」はまだできてゐない。江戸にゐる桂川甫周や、工藤平助と交はりをつゞけてゐた。ある日、工藤平助を訪ねると、今度柘植つげ長門守といふ旗本が長崎奉行に任ぜられて赴任するのの際し、和蘭語もわかり、和蘭人と應接のできる者を家來としてつれて行きたいのでさういふ人物をさがしてくれ、とたのまれたといふ話をして、平助が子平に再度の長崎行きをすすめた。

奉行の下役人となつて長崎へ行けば、たやすくはいれない出島に出入りして直接和蘭人と交はることができるので、子平は大そうよろこんで再び長崎へ出かけた。はじめの時とちがつて今度は子平は長崎奉行所の下役人である。

子平はすぐに松村世綱を訪ねて再會をよろこび、松村の紹介で大通詞本木榮之進と知り合つた。本木の案内ではじめて出島へはいつて、カピタン(領事)のアーレン・

ヘイトとも知り合ひとなつた。

出島といふのは長崎の港の中に築かれた扇形の小さな島で、こゝに和蘭人たちがとどこめられてゐて、自由に長崎の町へ出られないやうにされてゐた。出島から町に出るのにはたゞ一つの橋があつた。その橋のたもとに屯所が設けられ、奉行所の役人が朝夕見張つてゐた。

出島の和蘭屋敷に出入りできる日本人は奉行所の役人だとか、特別の人にかぎられてゐた。

橋を渡つて島の中にはいつて行くといくつもの建物があつて、その一つに通詞部屋がある。奉行所の通詞は毎日この部屋にきて、和蘭人と用談をした。

出島にはカピタンを頭として、醫官もをれば、書記役もをり、支那人や黒ん坊が下男として召使はれてゐた。そして一年に一回、二隻の和蘭船が本國から珍しい品

物を積んで入港する。

その品物を日本へ賣り、日本からは、絹糸や紙や樟腦などを買ひ、同じ船に積んで歸る。はじめの頃は和蘭船は四隻もきてゐたが、この貿易によつて日本の金貨が次第に海外に運び去られるのを恐れた幕府は、今では和蘭船の來るのを二隻に制限してゐた。ずつとのちには一隻になつた。

和蘭の黒船が本國に歸つてしまつたあとは翌年再び入港するまで、出島の和蘭人たちは町へ出ることもできず、島の中でさびしい朝晩を送らねばならなかつた。和蘭人たちは、この出島の生活のことを、「日本の淋しい牢屋の生活」と呼んでゐた。和蘭人たちは自然と暇でもあるので、日本の通詞たちが訪ねてくるのをよろこんだ。そして通詞たちが海外の新知识について質問をすると熱心にしへるのであつた。日本の通詞たちはかうして和蘭人から、いつも新しい知識を學

びとつてゐた。本木榮之進もカピタンのアーレン・ウエルレ・ヘイトから外國の地理や、歴史や、醫學や、博物學まで熱心に學んだので、ヘイトも本木を大そう愛してどんなことでも快くをしへてゐた。

今日も本木がきたのでヘイトはにこ／＼と自分の室から出て通詞部屋にくと、やせておとなしい本木のうしろには、色のまつ黒な目の鋭い四十歳くらゐの日本の武士が一人つきしたがつてゐた。本木はその武士を指して、

「ヘイト先生、これは今度長崎奉行の家來としてこちらにこられた林子平氏です。あなたから和蘭の知識を學びたいといふので連れてまゐりました。」

ヘイトは進み出て子平の手を握つた。

「どんなことを、あなたは學びたいのですか？」

「私はすべてのことを學びたいのです。世界の地理、歴史を學び、砲術や、軍艦の

ことを教へていただきたいのです。」

と、子平は熱心に答へた。

「さうですか。それを學んでどうするつもりですか？」

「カピタン、日本國は海の中の島國です。そしてとても小さい國です。しかし二千年の歴史を持つてをります。かつて一度も外敵の侵入を受けたことはありません。しかしもし國防をゆるがせにすれば、いつ外敵の難を受けるかも知りません。私はわが國を守るために世界の形勢を知り、大砲や軍艦のことを知りたいのです。」

するとヘイトは子平の肩をたゝいて、大きくうなづいた。

「そのとほりです。あなたの考へは大そう立派です。できるだけ私があなたのお力になりませう。」

「お願いいたします。」

かうして子平はそれから毎日ヘイトのところへ通ふやうになつた。

「三國通覽圖説」の中でヘイトから聞いた話として書いてあることも、恐らく朝晩ヘイトと子平が日本の國防について、論じあつた話の一部分にちがひない。子平は自分が蝦夷探検でしらべてきたことなどを話して、ヘイトにその意見を求めたものであらう。

ヘイトに學ぶやうになつてから、子平の學問は大いに進んだ。一昨年、松村世綱の家で見た世界地圖のもつと精しい圖が、ヘイトのところにあるといふことを、やがて本木榮之進から聞いた子平は、ヘイトにたのんでそれを見せてもらつた。それらの圖を一所懸命寫しとつて、のちに江戸に持つてかへつた。

松村も、本木も和蘭通詞であつたが、子平は同じく蘭學を學んでゐても、自分は日本の國防の方法を工夫するために學ぶのだと、ヘイトにその目的をつけてゐた。

そして通詞たちとはちがつて、子平は見るからに日本の武士らしく、質素ななりをしてゐた。大きな刀を二本も腰にさして、毎日出島にやつてきた、ある時、ヘイトが子平にいつた。

「林さん、學問をするのに刀はいりませんよ。そんな大きな刀を何のために毎日さしてくるのです。まさか和蘭人に對する用心のためでもありませんまい。」

子平はもつての外だといふやうな顔をして、

「いや、ヘイト先生。この刀は日本武士の魂です。人を威すためでなく、自分の心の守りとして、いつも腰にさしてゐるのです。」

「しかし、重さうで不便ぢやありませんか。」

「決してそんなことはありません。魂を身につけて歩くのが不便だなど、思ふものは日本の武士には一人もをりません。」

「成程さうですか。しかし、私たちが魂といへば心のことで、形にはみえません。」
「さうです。心を形にあらはしたものが日本の刀です。いや、刀は武士の心以上の
もので神の心です。武士に勇氣を注ぐ神の守りです。」

「そんなに尊い立派なものなのですか？」

「さうですとも。日本の刀に勝る刀はよその國にありません。」

「いや、和蘭にも刀はありますよ。」

ヘイトは自分のサアベルを持つてこらせて子平に見せた。

「しかし日本刀は和蘭の刀などとは比べものになりません。」

と、子平も自分の刀を出して見せた。

「それでは、どちらが立派な刀か互ひに比べて見ませう。」

「いや、刀といふものは、たゞ比べただけでは何にもなりません。斬りあつて見て、

どつちが折れるか、ためして見なければわかりません。」

「ではさうしませうか。」

「よろしい。それでは、和蘭の刀を七本揃へて、私が自分の日本刀で一ぺんにたち
切つてごらんに入れませう。」

「和蘭の刀を七本……それをあなたが、日本刀でほんたうに切つて見せるとあつし
やるのですか？」

「さうです。七本とも一ぺんに切つて見せませう。」

するとヘイトが、にはかに笑ひ出した。

「ハハハ……そんなことができるものですか。それは奇術です。」

するとあたりにもた和蘭人や、日本の通詞たちが、子平の大言を快からず思つた
のか、ぜひためしてみても下さい、といひ出して、ヘイトも面白さうに同意した。

そこで座敷のまん中に碁盤を持ち出し、その上に和蘭のサアベルを鞘から抜いて七本ばかり、束にしてのせた。

子平は襷がけになつて、おのれの大刀を抜き放つと、その前に片膝をついて、大上段にふりかぶつた。子平の顔は緊張して眉はつれ上り、唇は固く結ばれ、目は鋭く、一心に碁盤の上をみつめて身構へたが、えいッ！ といふ鋭いかけ聲とともに打ちおろした子平の刀は、まるで木屑でも切つたやうに、七本の和蘭サアベルを切つてしまつた。

ヘイトをはじめ、これを見てゐた人々はすつかり驚いてしばらくは聲もなかつた。

この時からヘイトは子平が腰にさしてゐる刀をけなすやうなこともなく、

「あなたはほんたうの日本人です。外國の知識をいくら學んでも、日本の精神を忘れてしまつては決してお國の役にたちません。あなたははじめから立派な日本精神

を持つてゐて、お國のために國防の方法を工夫しようといふ目的で、外國の學問をしたいといふのだから、あなたこそほんたうの科學者です。」

さういつて子平はげました。

まもなく思ひがけない出來事が長崎におこつた。

鎖國時代、徳川氏が交通と貿易を許したのは、和蘭と支那の二國だけであつたので、長崎には和蘭人の他に支那人が澤山きてゐた。それらの支那人は一とまとめになつて、そのころ俗に唐人屋敷といふ區劃の中に住んでゐた。そして、帆船で支那からいろいろな商品を日本へ運んできては賣買をしてゐた。その商人たちと日本の商人たちとの間に賣買のことで争ひがあつて、奉行所が支那人に不公平な處置をしたといふので、唐人屋敷に集つた六十一人の支那人が、一隊となつて工神堂といふお社に立て籠り、槍や鐵砲を揃へて氣勢をあげた。すてておいては、長崎の町に火

をつけて焼き拂ふやうなことをはじめないともかぎらない。奉行所の役人たちは血相をかへて、右往左往した。その時、子平は先頭に立ち、わづかに十四人の奉行所の役人をひきつれて工神堂に出かけて行つた。

工神堂に立て籠つた支那人たちは、鐵砲を撃つたり石を投げたりして喊聲をあげながら日本の役人に抵抗したが、子平は刀も抜かず躍りこんで、片つぱしから支那人たちを鐵拳でうち懲らし、工神堂の柱や戸を両手でゆすぶつて毀してしまつた。その勢ひに怖れて、一と處に集まつてしまつた支那人たち十八人ばかりを生け捕りにして、子平は奉行所へ引き上げてきた。

あとで子平はこの時のことについて、

「支那人は、隊を組んで戦争をするのには、とても弱い相手である。およそ支那人にかぎらず、外國人は皆さうではあるまいか。」

と、いふ意味のことを書いてゐる。

それにしても子平はこの時から、たゞ學問に熱心なだけではなく、大そう武勇に富んだ武士であることがわかつて、和蘭人たちの間にも、奉行所の役人たちの間にも、にはかに有名になつた。

十二、長崎の別れ

かうして子平は四十二歳になるまで、長崎にゐた。今は和蘭語も話せるやうになり、西洋の兵術も究めた。世界の地理や歴史もすつかり學んだので、もう江戸に歸ることにきめた。ヘイトは別れを惜んで、出島のオランダ屋敷の自分の部屋へ子平を招いて送別の宴を開いた。ご馳走をして子平をもてなした上、

「林さん、どうかあなたは今まで學んだことを十分に活かして日本の國の役に立てて下さい。それを待つてゐます。」

と、固く手を握つた。子平はヘイトの長い間の深切を感謝して、

「いや、私の研究はまだ――足りなくてこれからだと思ひます。私はたゞ今四十二歳ですが、死ぬまで學問をはげみ、やがて立派な國防の術を工夫するつもりです。」と、自分の考へを述べた。

するとヘイトの傍についてゐた他の和蘭人が、子平にいつた。

「では林さんは、我々和蘭人から兵術を學んで、そして、我々を撃つ工夫をするにあつしやるのですか？ それは恩を仇でかへすわけですね。」

子平は椅子から立ち上つて、手を振りながら答へた。

「決してそんなことはありません。むしろ今のやうに日本が國を守る術がわからな

くて、外國からいつ攻め込まれても防ぎやうのないやうな心細い状態では、かへつて外國の野心を起させるやうなものです。外國から攻め込まれないだけの國防の立法を立てて、國を守るやうにすれば、戦争は決して起らないと思ひます。私の考へてゐることは、世界中を平和にして産業の發達を計り、國民の幸福を計るのには、それ〴〵の國が平等の國防を施すといふことだと思ひます。」

ヘイトが大きな聲で叫んだ。

「さうです、そのとおりです。私もさう思ひます。それでなければ林さんに、世界の地理や歴史や兵術を教へはしなかつたでせう。日本の北の方をごらん下さい。松前藩に任せつきりで幕府は何の國防の準備もしてゐません。全くうち捨て、あるのも同然です。ロシアはそれにつけ込んで、カムチャツカから千島へ渡つて、蝦夷を取らうとしてゐるのです。このまゝでは戦争が起るでせう。そしてこのまゝでは必

ず日本が負けると思ひます。早く幕府が北方を守るのが大切だと気がついて、蝦夷の地に兵營を造り、砲臺を築き、軍艦を配置するやうにして武威を示したならば、ロシアも日本を恐れて勝手な真似をしないでせう。すなはち、平和が保たれると思ひます。この話を林さんが江戸に歸つてよく幕府の上役人に説いて、早く北の方を守る策を講じて下さい。和蘭人としてのこれが私の日本に對する深切です。」

「ありがたう、ヘイト先生。必ず先生のおつしやつたやうに努力いたします。」

と、子平が力強く答へると、ヘイトはうなづいて、テーブルの上のコップを取り上げた。

「それでは江戸にかへる林子平君のために、健康をいのります。」

みんながにこ／＼としてめい／＼のコップを手にとり上げた。子平は何度も禮をうつて、自分のコップをとり上げ、一同が「おめでたう。」と叫んで乾杯した。



子平のかいた送別會の圖

この送別會のことは、長く子平の心に楽しい思ひ出として残つた。あとになつて、子平は自分自身でこの時の有様を繪にかき自から版木に彫つて印刷した上、それを多くの友達に配つた。今残つてゐるその繪をみると、五人の和蘭人が、テーブルに向ひ合つて、二人の支那人のやうな給仕人がお酒をついだり、食物のお皿を運んだりしてゐる繪の中に、左側に誰れもゐない椅子を並べてある。そして「A」といふ字をしるしてある。これは「A」の字がアルファベ

ツトの中の一番はじめの字であるから、この椅子にかけてゐる人が宴會の主賓であることを暗あんに示したのである。そして、そこから向つて左側に掛けてゐる二人目の

和蘭人の椅子に「H」といふ字が書いてあるのは、ヘイトの頭文字にちがひない。

なぜ主賓に招かれた自分の姿を描いてゐないのであらうか？ その頃は日本人が外国人と交はるのを固く禁じられてゐたから、長崎奉行所付きの下役人にすぎない自分が、それほど深く和蘭人と交はつてゐたことがこの繪からわかつては、或はそのために罪を受けるやうなことがあるかもしれないと、用心をしたためである。

ついでにいへば、子平が自分で彫刻したこの繪の版本は、もとは宮城縣の山口貴信といふ人が所有してゐたが、山口さんが陸軍主計として水戸に在任中、その家が火事にあひ、他のものと一しよに焼けてしまつて、今は傳はらないのは惜しいことである。

十三、富國論

子平は長崎から江戸にかへつた。それからさらに故郷の仙臺に歸つた。歸つてきて見ると故郷はもとのまゝであつた。政治は亂れ、百姓は貧乏に苦しんでゐた。

國を出る前、政治の仕方について殿様に上書してもうけいれられなかつたのに愛想をつかした子平は、今また歸つてきて、眼の前の有様を見るに見かねた。そのためにもう一度意見書を書いて殿様にさし出した。

その上書のはじめには、「非常のことをしとげようと思へば、必ず非常の人の力を用ひなければならぬ。」といふ意味のことを述べて、愚かな家老や上役人たちにまかせてあいては、いつまでたつても國はよくなるといふことを仄めかした。

この上書にあらはれた子平の考へは、「國防のためには兵の備へを強くしなければならぬが、強い兵を養ふには國が富んでゐなければならぬ。」といふ富國強兵の意見である。ではどうして國を富ませるかといふことについては、

「百年かかつて國を富ませる方法は、人民に文武を勵まして、教育につとめ、立派な進取的の考へを持つた國民を養成することである。さうすれば百年目にはその國が必ず富んだ國となる。」

と、いふ意味を子平はのべてゐる。その次ぎには、

「五十年で國を富ませさうと思へば、國中の産物を巧みに交易し、氣候や、風土に合ふ産物をふやすやうにする。山からは、材木や藥品や、動物の毛皮がとれる。海からは、鹽と、魚と、油（鯨や魚の油）がとれる。河や海はこれらの産物を運ぶに利用し、田や畠は農産物を作り、雜草は牛馬を養ひ、およそどんな

ものでも利用することによつて國の富を得ることができるといふ意味を書いてゐる。

「二十年の間に國を富ませさうと思へば、農業を獎勵し、牛馬を産みふやし、百姓にはお金で物を買はせないやうにして、入用な物を米と取り換へるやうにする。かうすれば百姓たちの無駄がはぶけ、自然に節約するやうになつて、國が富むのである。」

「十年にして國を富ませさうと思へば、人民の衣食住を制限して、極力節約を計るにある。急がないことを皆やめて、殿様も家來も、極めて質素に暮らし、税金をとらないやうにする。」

「一日だけ一家を豊かにしようと思へば、三度食べる飯を二度に減すのである。かうすれば一家のうちの富はすぐ實現する。しかしさうするためには、まづ、一

家の主人が、わが身を質素に修めて、他の家族に見習はさなければならぬ。だからその身を修めるのが、天下國家を治めるはじめである。富國經濟の根本は、人に教へて實行するのではなく、主人が中心となつて、一家の家族が陸まじく、一しよに實行することなのである。食べ物をぜいたくにする、着物が買へなくなる。着物のぜいたくをすると住居が破損しても繕ふ金がなくなる。無理にその家を繕つて、立派にしようとしても、一家の収入が不足して、やがては、家の人達みんなが貧乏のあげく、ちり／＼ばら／＼になつてしまふのである。國全體もやはりこの通りである。だから富國の道を実行するには、めい／＼が、信義の心を基として、自分勝手のふるまひをしないやうにつとめなければならぬ。孔子が、『信なくばたゞず』といつたのはこのことである。』(大意)

これが子平の富國論の根本である。かうして子平はじゆん／＼と自分の正しい考

へをのべて仙臺藩の政治をよくし、國をよくしようといつとめた。

「文武にはげむ人や、中興(すたれかけた物事を途中で立派に立てなほす)の人を表彰せず、己れの職業を怠るものを罰せず、正しいことを主張するものを退け、まちがつたことをいふものを役人にとりたてゝ、てゐては、その國は百年たつてもよくなる。時によつては國に饑饉の起ることのあるのを用心せず、つまらない易者や、占ひ師のやうなものにお祈りをさせて、饑饉や風水害が除かれると思つたりしてゐては、五十年たつても國は救はれない。生ひ立つてゐる山の木を春や夏の間切り倒して使つてしまひ、農事に熟達した百姓を殿様が江戸に出たりするときの人夫に使ひ、また耕作の仕方をよく知らない若い百姓に農作を任せきりにしたり、或は百姓が商賣をしたり、お金持ちが役人に金錢を出して名譽を與へてもらひたがつたり、貧しい百姓が貧しいからといつて租税を納

めず、よく働くい、百姓がゐても表彰せず、村々のものが農業を怠つて遊び暮し男や女が着物の袖を長くしてゐるやうなことでは、國の貧乏は二十年もつゞくだらう。大きな家を勝手に建てたり、美しい着物をこしらへたり、おいしいものを勝手に食べたたり、朝寝や夜ふかしをして、その職業に飽きてすぐ他のことをしたりするやうな人がふえては、その國の貧乏は十年もつゞくだらう。」(大意) 子平はかうも言つてゐる。これは多分子平が、その頃の仙臺藩内の實際の有様をみて、言つてゐるものにちがひない。

そして子平は、こんな風に國が亂れてゐるのは仙臺だけでなく、日本中の國々のほとんど大部分がさうであらうと思つた。

だから自分の考へを仙臺藩だけにでも實行させ、仙臺一藩が立派に治をさまつて富國となつたならば、それが實地の手本となつて、日本中の國々にも見習はせるやうにしたいと心を配つて意見書を書いたのである。 残念なことに子平のこの意見もやはり取り上げてはくれなかつた。子平は残念でならなかつたが、がまんをする外はなかつた。この二度目の意見書を書いた時、子平は四十四歳であつた。

十四、先見の明

二度目の意見書がやはり何の役にも立たなかつたのがつかりした子平は、もう一度長崎へ行つて學問をつゞけようといふ考へになり、四十五歳の春、三度目の長崎旅行に出發した。

それは天明二年の春であつた。子平はこの時の長崎旅行中に、九州の地圖や外國

の地圖を作つた。その他にオランダの軍艦の繪を描いた。その繪は、「阿蘭船圖説」と題して、巾二尺一寸、長さ一尺九寸の大きさの紙に描いて、長崎の豊島傳吉といふものに印刷させた。そのころは幕府の鎖國主義のため、オランダ船の繪などを、印刷して世間に弘めたりすることは、ほとんど許されなかつた。圓山應舉がオランダ船の浮んでゐる長崎港の風景を描いた繪や、谷文晁が、松平樂翁（定信が退隱してからの名）のいひつけでやはりオランダ船の繪を描き、樂翁自身がその上に、

この船のよるてふことを夢のまも忘れぬが世の寶なりける

と、書いたのが残つてゐるが、それらはみなたゞそれ一枚だけを描いたのである。それに反して、子平はオランダ船の繪を印刷して、世の中に弘めたのである。珍しかつたので繪はたくさん世間に弘まつた。子平はのちにこの繪を江戸でもう一度印刷して「海國兵談」を出版する費用の一部にあてたくらゐである。

阿蘭船圖説



子平の描いたオランダ船の圖

かうして三度目の長崎留學の内に、日本の國防の方法についての研究や工夫がすつかりでき上つたので、これを「海國兵談」と題する書物に著はさうと決心した。そして長崎でその準備にとりかゝつた。

「海國兵談」は子平の一生を費した研究の結果を述べたものである。その原稿が完成して書物になるまでには、大へんな苦心が費された。

子平は翌年の天明三年に江戸に歸つてくると、方々の學者や、幕府の役人を訪ねて、自分が「海國兵談」に書きはじめてゐる國防の意見をのべて賛成を求めた。しかし、海外の形勢を知らず、日本の國が世界の中のどういふ位置にあるかさへほとんど知らないそれらの人々は、何のために日本の國を守る戦さの仕方や、外敵に攻めこまれた時の防ぎやうなどを今すぐ用意しなければならぬかがわからなかつた。そして子平が徒らにたゞ面白がつて今に外國が日本へ攻めてくるなどといふ

らすのはけしからんなどとそしるものも少くなかつた。子平は世の中の人々がすべて、自分の深い考へをわかつてくれないのをどんなに嘆いたことであらう。

しかし、嘆いてゐるだけでは何にもならない。子平はそれらの人々に對して、日本がいつロシアから攻めこまれるかも知れない危い有様になつてゐるかをまづ知らせなければならぬと思つた。それを知らせた上で、日本の國をどういふ風に守らなければならぬか、その方法を「海國兵談」によつて世の人々に教へようと思つた。

そこで、子平が書いたのが諸君のもう知つてゐる「三國通覽圖説」である。「三國通覽圖説」を書くためには子平は子供の時、父から教はつた新井白石の「蝦夷誌」や、工藤平助の「赤蝦夷風説考」などを参考に讀み、ヘイト先生から學んだ知識もと入れなければならぬ、自分が未だに人にかくしてゐる蝦夷地への實地探檢を基として、國防の考へを日本の國民に與へるやうに力をつくしたことはすでにのべたとほりである。

それからこの書物の中には、さきにもいふやうに、小笠原島が日本の島であることを書いてある。子平が天明五年に「三國通覽圖説」に、もし小笠原島が日本の領地であると書いてなかつたなら、或は小笠原島はアメリカに奪はれてしまつたかも知れないのである。

それはかうである。よほど後になつて子平の「三國通覽圖説」をみたドイツ人のクロフカロットといふ人と、フランス人のラニヘイトといふ人は、日本のこの本をそれぞれドイツ語とフランス語に翻譯した。

ところがアメリカのペルリ提督が小笠原島を占領した。その時、幕府はアメリカに對して、小笠原島が日本の領地であるといひ争つたが、アメリカは、そんな證據は何にもないではないかといつて譲らなかつた。そして、この島は日本から取つたのではなく、アメリカ人がはじめて發見したのだから、もしそれ以前に日本人が發見した證

據があれば返すけれども、さうでなければ、これはアメリカの領地だといひ張つた。

ところが丁度そこへクロフカロットのドイツ語譯と、ラニヘイトのフランス語譯の子平の「三國通覽圖説」が前後してヨーロッパで出版されたのである。それには、ペルリ提督が小笠原島を占領するよりもはるか古い年代にすでにこの島が日本人小笠原某によつて發見されてゐることを、林子平が書いてある。これが證據になつて日本の幕府の言ひ分が勝ち、小笠原島を、アメリカから日本へとり返すことができた。このことだけでも、林子平の手柄は、日本人がいつまでも忘れてはならないことである。

次に子平は「三國通覽圖説」の中で、このまゝはふつておけば蝦夷が今にロシア人に侵略されるだらう、と警告したが、「三國通覽圖説」がやつと出版された天明六年には早くもロシアの軍艦が蝦夷へやつてきたし、それから五十年後には、ほん

たうにロシア人が北海道を荒したのである。

また子平は「三國通覽圖説」の中で、琉球と朝鮮が日本にとって大切な國であることをのべてゐるが、琉球は明治七年になつてはじめて正しく日本の一部分となつた。さらに明治四十三年に朝鮮が日本と合併したことを考へると、すでにその昔にさうしなければならぬと心配した林子平の考へが、ずつとのちになつてから實現したことがわかるのである。これらのことを「先見の明」といふ。子平は實に先見の明に富んだすぐれた先覺者であつたのである。

かくて子平の「三國通覽圖説」が世に出ると、心ある多くの日本武士たちによつて熱心に讀まれ、人々の間に弘まり、今いふやうにドイツやフランスにまで弘まつたのである。

子平は四十八歳になつた。今は一生涯をかけた著述である「海國兵談」の草稿に

一所懸命であつた。そして、四十九歳となつた天明六年五月に、「海國兵談」の草稿はつひにできあがつた。

十五、「海國兵談」の苦心

子平は五十歳になつた。去年できあがつた「海國兵談」を早く出版して世の中にひろめ、日本の國防に役立てたいと思つた。

子平は方々へその草稿を持ち歩いて出版をたのんだが、だれもひきうけてくれるものはなかつた。子平は淋しく残念であつたが、國のためにつくさうと思へば、どうしてもこれを出版しなければならぬと決心して、自分の乏しいお金で版木を彫り、紙を買ひ、やつと三十部ばかり印刷した。これが「海國兵談」の前五卷である。

前五卷は世に出たが子平の力ではもう容易にあとがつゝかない。「海國兵談」は、全部で十卷である。どうしてもあとの五卷を出版して世に残したいと思つた。五十歳の天明八年には、江戸から京都へ上つて、朝廷に「三國通覽圖説」を献上し、中山大納言に會つて、海防をおろそかにしてはならないといふ平生の意見を述べ、「海國兵談」の出版を助けていたゞきたいと申し出た。

しかし、京都にゐて世界の情勢などを全く知らない中山大納言は、子平の意見には少しも耳をかさなかつた。子平はかういふ公卿がゐては、自分の愛國の志も、朝廷に聽えることもあるまいと悲しんで、しを／＼と江戸に歸つてきた。

そのころ、江戸では幕府の老中頭は松平定信であつた。定信は賢明な人で、さきにちよつと話したやうに、谷文晁に和蘭船オランダを描かあがせて、その傍に國防をすゝめる歌を書いたやうな政治家である。

子平は何とかして定信に會ひ、自分の意見を述べたならば、定信は必ず自分を褒めて「海國兵談」を出版する骨を折つてくれるであらう、國に盡くさうとする自分の志を、定信ならきつとわかつてくれるであらうと大そうあてにして、五十二歳の秋、つてを求めてつひに定信に會ふことができた。ところが定信は、子平の國防の意見をきゝとつた上で、

「お前は、兵學者として有名になりたいために、さういふことを考へ出して、いひふらして歩いてゐるのだらう。」

と、いつてとり上げてくれないのである。子平は片腹痛く思ひ、賢明だといふ松平定信が、案外心が狭いのにつきり失望してしまつた。

もうどこへも自分の志を訴へるところはなく、「海國兵談」を出版する助けを受けらるやうなところはない。たよるものは自分の力だけである。やはり、前卷を出版し

た時と同じやうに、あとの出版もそれに必要な費用はすべて自分で作る外はない、と深く覺悟を定めた。子平が長崎で一旦出版したところある和蘭船の繪を再び江戸で印刷して賣つたのはこの時のことである。しかし、それくらゐの收入^みりで十巻に及ぶ「海國兵談」の印刷ができるわけがない。容易に見込みがたないので子平は力を落して五十三歳の冬、一たん故郷に歸つてきた。

林子平は日本の生んだ最初のすぐれた國防科學者である。そのことは子平が著した「海國兵談」の内容を見ればよくわかるのである。しかし時代に先んじたすぐれた科學者は、しばしばおかれてゐるその時代の人々と意見があはないために迫害されることが多い。外國でもたとへばガリレオ・ガリレイのごとく、「地球は丸い」といふ科學上の眞理を唱へたために、その一生は全く古い人々から苦しめられとほした。しかしそれでも眞理を枉^まげないのが「科學の英雄」である。

林子平もそのとほりであつた。一生を費した國防の著述を、たれもがかへりみてくれないといふ、いひきれない淋しさを抱いて仙臺に歸つてきた子平の受難（苦しむ目にあふ）の生涯は、むしろその時から始まつたのである。

十六、高山彦九郎

仙臺に歸つた林子平は、兄の嘉膳や、友達の藤塚式部の助けをうけて、版木を彫る版木師をやとひ、少しづつ、「海國兵談」を本にする用意を進めた。

版木ができると紙を買つてきて、子平は自分で印刷をした。しかし、すぐお金が足りなくなつて、ともすれば印刷の進行が止まり、版木師は、子平が手間賃をなかなかくれないのでおこつてしまつて容易に仕事をしない。子平は版木師に拂ふお金

をつくるために、何度も鹽釜の藤塚式部や、江戸の友達にお金を借りる手紙を出さなければならなかつた。

かうして、「海國兵談」を世に出すための苦心が続いてゐる時、四年前に蝦夷へきたロシアの船がまたやつてきて蝦夷を荒したといふ噂が傳はつてきた。

丁度その年の冬であつた。貧乏な子平の家の門をたゝいて、大きな叫び聲がした。「林子平といふ山師學者の家はこゝか？」

子平は版木に紙をあてがひ、上からなでては一枚一枚、「海國兵談」を印刷してゐたが、その聲をきくと版木を片づけ、櫛をはづして、入口へ出て行つた。門に立つてゐるのは旅行姿の武士であつた。赤ら顔の大きな男である。頬ひげはのびて眼は光り、着物は乞食のやうで、さしてゐる刀の鞘もはげちよろけになつてゐる。

「林子平はわしだがさういふお前は何者だ。」

二人は互ひににらみあつて、

「あれは、高山彦九郎だ。」と、その武士がどなつた。

「何だ泣き侍か。」

と、子平がどなりかへすと、高山彦九郎がまげずに又どなつた。

「この山師おやぢめ！」

「なぜわしが、山師おやぢなのか。」

と、子平がいふと、彦九郎は肩をそびやかして、

「わけがきゝなければ言つてきかしてやらう。」

と、座敷に上つてきた。二人はせまい部屋の中に向ひあつた。

「いかにもわしはお前がいふとほり泣き侍だ。しかし、何のために泣くのか、お前は知るまい。」

さういひながら高山彦九郎は斜めに肩に掛けてゐた風呂敷包みを下ろして、ふところから一冊の帳面をとり出した。

「このとほりわしは諸國をまはつて代々の天子様の御陵をたづねて歩いてゐる。日



渡邊華山のかいた高山彦九郎の圖

本は萬世一系の國だ。それだのに、その代々の天子様の御陵が荒れ果て、中には御所在もわからなくなつてゐるものもある。天孫瓊瓊杵尊は天照大神から豊葦原瑞穂國は世々我が子孫の皇たるべき地なり、とのおほせを

うけて降臨あらせられた。その日本の國で、天皇の御陵が荒れ果てたまゝになつてゐるのを見ては、君のために哭き、國のために哭くのだ！」

子平はすぐにいひかへした。

「哭いただけで國がよくなるのか、馬鹿め！」

「もちろんさうではない。わしは、諸國をめぐつてゐる間にも、多くの武士たちに、日本が天皇の國であることを知らせ、武家が一日も早く國の政を天子に還し奉るのがほんたうだと、説いてゐるのだ。そのためには代々の天子の御陵をしらべてこのとほり、わが國が萬世一系の尊い國柄であることを、一層あきらかにしようと志してゐるのだ。」

「それは大切なことであらう。しかしもつと大切なことがある。お前はそれを忘れてゐるぞ。」

と、子平がいふと、彦九郎は眼に怒りをあらはして子平をにらみすゑた。
「日本人として一番大切なこと、いへば、君臣の分をあきらかにすることだ。その外に大切なことなどはない。」

「君臣の分はすでにあきらかである。すなはち天子様は徳川氏を征夷大將軍に任じたまひ、將軍は天子の命をうけて國の政を行なつてゐるのだ。將軍が一所懸命日本の國ををさめて、よくしなへすれば忠義をつくすことになるのだ。それだから、將軍が日本中の武士をひきゐて、富國強兵の實を圖り、國防の道を樹てるのだ。これを実行することが大切なことなのだ。」

子平がこゝまで自分の考へをのべると、彦九郎は怒つていきなり子平に打つてかかつた。

「この野郎！それこそ、日本の國を滅すよくない考へだ。見ろ、將軍は天子を京都におしこめて奉つて何一つお指圖をうけようともせず、日本中を恣にしてゐるではないか。そんな心がけて富國も強兵も實行できるわけがないのだ。それがわからないのか！」

彦九郎はさう叫びながら、子平をその場にねぢふせた。上から馬乗りになつて、首すぢをおさへつけると、

「林子平、眼をさませ！」

と、拳固で、子平の頭をさんぐなぐりつけた。

「きさまが國を守らうと思つて、『三國通覽圖説』を著はし、『海國兵談』を著はさうと、いかに苦心をしても、松平定信はきさまの志を受け入れようとはしないではないか。もし幕府がほんたうに、天子様に忠義をつくすつもりで、日本の國を守らねばならないと思つてゐるのなら、きさまの『海國兵談』をすぐにとりあげて、さ

さまの意見を實行するはずではないか。幕府に國をまかしておいては國を強くするためのどんな方法も行はれないといふことがまだきさまにわからないのか！」

子平は五十三歳になつて、貧乏の上に、長い間の心の苦しみのために體を弱らせてゐるので、大男の彦九郎にはとてもかなはなかつた。

彦九郎はロシアの船が蝦夷へきたときいて、はるばる現地まで、その様子を探りに出かけて、歸り道に林子平をたづねてきたのである。そして子平が折角國防について、立派な考へを持つてゐながら、いつまでも幕府にばかりたよる考へを改めないのを諫めようと思つた。そのために子平をうちすゑたのである。

彦九郎は、さんぐに子平をなぐつておいて、そのまゝ立ち去つてしまつた。子平はそこへ倒れたまゝうめいてゐた。なぐられたのが残念であつたのではない。彦九郎の今の言葉が子平の胸をついたのである。

子平はそこへ倒れたまゝ、いつまでもいつまでも彦九郎の今の言葉を心にかみしめてゐた。

十七、友の慰め

子平が部屋の中に倒れてうめいてゐた時、友達の藤塚式部がはいつてきた。式部は子平がにはかに病氣にでもなつたのではないかと驚いてかけあがつてくると、子平の肩口を引き起して、

「どうしたのだ、一體どうしたのだ？」
と、きいた。

「さや、何でもなす。」

子平は起きて坐りながら、

「今ここへ高山彦九郎が訪ねてきたのだ。」

「やはりさうか、蝦夷からの歸りだといつて、けふ不意に私のところへ立ち寄り、これから林子平に會ふのだといひながら出かけやうとしたので、わしはそれを引き止めた。しかしやはりやつてきたのだな。」

子平は、式部の言葉をききとがめた。

「なぜ、高山を引き止めたのだ？」

すると式部は、悲しさうな顔をして、

「高山とおぬしとは日本の國體に對する考へがちがつてゐるのだ。會へば必ず争ひになると思つたから引き止めたのだ。」

「さうか。君のいふとほり、争ひになつてわしはこのとほりさんく高山になぐら

れた。」

と、子平は瘤だらけになつた顔や首をなでさすつて、亂れた着物を直しながら、
「腕づくでなら、わしは決して高山に負けはしない。長崎でオランダ人の刀を七本束にして斬つたこともある。しかしわしは思ふところがあつてあいつに手向ひはしなくなつた。いや手向つて争つてゐるうちにわざと負けて、さんく打たれてやつたのだ。」

今度は式部が、子平の言葉を不思議に思つてきいた。

「それは、どうしてだ？」

子平は、腕を組んでそこに坐り直した。そして深い溜め息をついて答へた。

「今までわしは君から日本の國體について何度も正しい話をききながら、どうしても心の底から納得できなかつたのだ。日本の國が神代以來天子様のものであるとい

ふことはよくわかつてゐる。君臣の分は萬世に亘つて變らないといふことも知つてゐる。その點ではわしの考へは君や高山の考へと何にも相違はない。」

「うん、それなのに何が納得できなかつたのだ？」

「わしは、國體についての正しい考へははじめからちやんと持つてゐるのだ。たゞ臣下たる將軍が天子様を輔翼し奉つて、今のやうな武家の政治が行はれてゐるのだから、將軍が天子様のため忠義を盡して國をよくして行けばいいのだと信じてゐたのだ。高山は國の政を將軍から天子様にお還し申し上げて天子様が御みづから政を遊ばし、奈良朝や平安朝の時代のやうにならなければ正しくないといふのだ。今のやうに幕府の制度ができたのはまちがひなので、これを奈良朝や平安朝の昔にかへさなければならぬといふのだ。」

「私は前からそのとほりにおぬしにいつてゐる。それを今までおぬしはなか／＼きさいれないので残念に思つてゐるのだ。」

と、式部がいふと子平は眼に涙を浮べて、

「すまなかつた。わしも今になつて眼がさめたのだ。このまゝではならないと思ふやうになつた。少くとも徳川氏が蝦夷の難を打ち拂ひ日本の國を強く守らうとしないならば、天子様に忠義をつくすとはいへないのだから何とかしなければならぬと思ふやうになつたのだ。高山や君がわしに教へるやうに、天子様が御みづから政をあそばすやうにならなければ、日本の國は強くならないとわかつてきた。」

子平は、自分の一生をかけた國防の研究を少しもとりあげてくれない幕府に對して心の底から望みを失つたのである。子平の心はどんなに苦しかつたであらう。その悲しさと苦しさが長い間の友達である藤塚式部にはよくわかるやうな氣がした。しかしその結果子平が尊皇の心に眼ざめたとすれば、それはどんなに喜ばしいこと

かshれないと思つた。

子平は涙をおとしながら式部に話した。

「しかし、わしは五十三になるまでの間、ただ國防の方法を一所懸命に工夫するの力を注いで、國の政をどうするか、日本のもとへの國體をどう榮えさせるかといふことには力を注がずにしたつたので、今になつても、さてどうして天子様の御世にかへすかといふことはわからないのだ。」

さういつて子平は涙を頬に傳はらせた。式部はなほさら口をきくこともできなかつた。今は同情の思ひで子平の心の苦しみを眺めてゐた。子平は高山彦九郎になぐられたため、すつかり破れた着物の肩口を寒さうに手でなでながら、

「いや、わしの一生かゝつて著はした『海國兵談』は幕府が日本の國を恣にしてゐる今の世の中で顧る人がなくても、やがては天子様の御世になつてきつと役にた

つ時がくるだらう。それは百年のちか五百年のちかわからない。しかしわしはその時を楽しみにして、やはり今やつてゐる『海國兵談』の版木を彫りつゞけ、印刷をしつゞけ、この本を後世に残して置くことにしたい。」

「うん、それがいいとも。」

と、式部が大きくなづいた。すると子平はさびしさうに笑つて言つた。

「藤塚氏、かういふ歌ができたがどうだ。」

そして子平は部屋の隅にあつた「海國兵談」を印刷する用紙の一枚をとつてきて、それに一首の歌を書いて式部にみせた。

傳へては我日本の本の兵の法の花さけ五百年の後

この歌は日本にとつて大切な國防科學の書物を、今かうして作つておけば、五百年も後には、花が咲いたやうに立派に國の役に立つであらうといふ意味である。

十八、蒲生君平

高山彦九郎が林子平を訪ねた時から問もなく、東北を廻つてゐた蒲生君平もまた仙臺にきた。

高山彦九郎も蒲生君平も、林子平よりも藤塚式部と友達であつた。それは式部が國學者として密かに尊皇の志を抱いてゐたので、同じ尊皇の武士として諸國の武士に國體の本義を説いて歩いてゐる高山や蒲生とはもともとから親したしかつたのである。

式部は蒲生君平を自分の家に迎へ入れてもてなしたが、君平がこれから林子平を訪ねるつもりだ、といふのをきいて、また心配した。

そして子平が彦九郎にさんぐなぐられた時の話をして、子平の詠んだ「五百年

の後」の一首を君平にきかせた。

君平は熱心に式部の話をきいてゐたが深い溜息をついて、

「さうでしたか。實は私もやはり場合によれば林子平を斬つてやらうとまで覺悟してやつてきたのです。外國人ならばいざしらず、日本人で愛國といへば即ち尊皇のこと、尊皇といへば愛國のこと、二つのものは一つです。この道理をわきまへられないものがあれば、それは決して國を愛してゐるのではないどころか、許しがたい悪い人間です。私は林子平を許しがたい考への人だと思つてゐました。だからもしよく話してみてもその考へを改めなければ斬つて捨て、も差支へないときめてゐたのです。しかし今あなたからきいて、林先生がすつかり眼ざめたことを知つてうれしく思ひました。むしろ私は林先生をお氣の毒でならないと思ひます。これから出かけて行つて慰めてきてあげたいと思ひます。」

さういつて蒲生君平は式部の家を出て行つた。

子平は高山彦九郎に會つたことから、體が弱つただけでなく、心も弱つて人に會ふのも、口をさくのも氣がすゝまなかつた。長い間の苦心が報いられないで子平の力はつきてしまつたのだ。子平は枕もとの紙と硯を引き寄せて書いた。

仰ぐぞよ千賀のしほがま神あらば我を二たび世にかへし給へ

自分はすでに五十三歳にもなつて體も弱つてしまつたが、もう一度生れかはつてきて日本を天子様の御世にかへすために盡したい、といふ心を鹽釜神社に祈る歌なのである。

子平がこの歌を紙に書きつけた時、戸口でだれかの案内を乞ふ聲がきこえた。

「たれだ？」

と、子平は硯や筆を片隅に押しやりながら首を起した。

「林子平先生。私です、蒲生君平です。」

と、いひながら君平が入口をあけてはいつてきた。

「歸れ、歸れ、そんな者に會ひたくない。」



蒲生君平

子平は寝てゐた蒲團を頭からかぶつてしまつた。君平は土間の上りかまちに兩手をついて、

「なぜですか？」

と、きいた。すると子平は蒲團から少しばかり顔を出して、

「わしは机上の空論でなく、實地の役に立つ國防の工夫をした活きた學者だ。お

前のやうな死學者しにがくしやとはちがふ、話したくない。」

「先生、私のどこが死學者です？」

「……………」

「先生！」

と、呼んでも子平はもう返事もしない。君平はとりつく島を失つてしばらくそこに立つて待つてゐたが、やがて黙つて戸口の外にでた。すると子平はむつくりとはね起きて、

「死學者まで！」

と、叫んだ。君平が振り返ると、子平は大きな聲で、

みねたかき名をも霞の埋木うもれぎはなほ世の中をわすれずの山

と、一首の歌をうたつた。君平はいそいで腰の矢立やたてを抜いて今きいた歌を書きつ

けた。そして子平の前まで戻つてきて、お辭儀をした。

「先生のお心はよくわかりました。」

子平は機嫌のいい顔になつて、

「それではもう一首。」と、いつて又別の歌をうたつた。

四方よもの國みちのく山に霧はれてあきらけき世の時をしぞ思ふ

蒲生君平はそつと涙をためて子平に別れて歸つて行つた。

十九、眞の科學者

子平は病氣になりながら、「海國兵談」の版木を彫るのと、それを印刷するのに一心不亂であつた。

版木を彫る職人に與へるお金がなくなると職人は怒つて仕事を休んだ。子平は仕方がないので自分で小刀をといで、版木を彫つた。そして何日も何日もかゝつてやつと一枚の版木ができたかと思ふと、今度はそれを印刷する用紙がないのである。用紙を買ふ僅かな金を借りるために、子平は雨の降る日、破れ傘をさし、五里の道を歩いて鹽釜神社の藤塚式部の家まででかけて行つた。さうしてやうやく紙を手に入れて版木一枚分だけ印刷するのである。

今日世に残つてゐる子平の手紙をみると、その時苦心して印刷した「海國兵談」の部数は僅かに三十冊である。

紙なさの今日の恨みにくらぶれば昔はものをおもはざりけり

と、子平は自分の苦心をわざとあどけてこんな歌に書きのこしてゐる。

かうした命がけの苦心のうちに寛政二年、子平が五十四歳になつてやうやく「海

國兵談」十冊分が完全にでき上つたのである。つひに完成したのである。

少國民諸君は、今から百八十年前に、林子平が國防に苦心して日本最初の軍事科學の著述を世に出すまでの苦しみを知つたであらう。「海國兵談」に説いたのは國防の方法であるが、かうした方法が何故必要であるかを人々に教へるために、先きに「三國通覽圖説」を書いたことも知つたであらう。

また子平がはじめは、高山彦九郎や蒲生君平のやうに、幕府を倒して日本を早く天皇の御世にしなければならぬといふ政治上の考へを強く持つてゐなかつた人であることも知つたであらう。

林子平は日本でおよそ最も早くあらはれた科學者の一人であつた。子平についで江戸時代にはたくさん科學者があらはれたが、その人たちはみんな科學の研究や發明によつて國につくす心を十分に持つてゐた。しかし徳川幕府を廢して日本を

天皇の御世にかへさねばならないと考へてゐる人はあまりゐなかつた。そして江戸時代の科學者の研究や發明は頑迷な幕府にかへりみられず、十分國の役に立たないでしまつた。江戸時代の科學者の苦心が實を結んだのは明治になつてからである。天皇の御世になつてからであつた。

科學者は愛國のために研究や發明の苦心をするのでなければならぬ。そして日本の科學者としての愛國の道は、さきに高山彦九郎や蒲生君平が言つたとほり、何よりもまづ天皇に對する忠義の心を強く持つことである。そして、自分の研究や發明が、いつでもそれが忠義をつくす行ひとしてなされる時に、はじめて眞の愛國となるのである。

この心のない科學の仕事からは、ほんたうに國の役に立つ結果は生れてこぬ。それは林子平のやうに、實に熱烈な愛國に燃えてゐる科學者でさへ、自分の研究や發明を徳川幕府に用ひてもらはうと思つて、幕府ばかりをあてにしてゐたために、少しも用ひられず、その志だけが残つて、實際には國の役に立たなかつたのをみてもわかると思ふ。

昭和の少國民諸君が、立派な科學者にならうとすれば、ワットや、ステブソンや、フランクリンや、エヂソンにならうと考へるだけでは駄目なのである。さう考へただけでは眞の日本の科學者ではない。

天皇陛下の御稜威みいづかによつて、わが日本國が大東亞の日本となり、八紘一字の大日本となるのをいささかでも翼たすけ奉るために必要な發明や研究に志すのが、眞の日本の科學者である。そしてこの心掛けを持つた人がやがて日本の發展とともに大東亞の科學者となり、世界の科學者といはれるやうになるのである。

二十、「海國兵談」の「まへがき」と「あとがき」

それでは林子平の「海國兵談」の内容を話さう。

原文のまゝではわかりにくいところもあるから、できるだけやさしく、要點を解説することにしよう。

「海國兵談」は林子平が、今まで話したやうに、少からぬ苦心をして出版したものであるが、どこまでも頑迷な徳川幕府は、子平から「海國兵談」の版木をとりあげてしまひ、子平は牢屋に入れられたのである。その話はまたあとにのべるが、さうして「海國兵談」の出版は徳川幕府によつて長い間禁止せられてゐた。その時から六十年あまりたつて、嘉永六年ペルリが浦賀にきた時、びつくりした幕府がにはか

に國防の方法を知らうとして、いやでも子平の「海國兵談」を讀まねばならなくなり、あらためて「海國兵談」に對する禁止を解き、その出版を許した。その時にはじめて「海國兵談」は世に出たので、現在方々に残つてゐるのはたいてい嘉永安政年間に刊行せられたものである。

その「海國兵談」は卷の一から卷の十までが五冊に分けられてあるが、まづ、卷の一の最初に子平の書いた序文がのつてゐる。それから話さう。

子平はかういつてゐる。

「海國とは四方みな海に圍まれた國のことで、海國には海國相當の武備がなければならぬ。海國に向つて敵の軍艦がやつてこようとする、風の都合さへよければ、二、三百里の遠くからでもその日の内に攻め寄せてくるし、反對に浪風の激しい時にはたやすくは攻め寄せられない。しかし、攻めてこようとするればいつでもこ

られるわけだから、平生の備へがなければならぬ。それには、何よりも海軍を造ることが第一だ。海軍の中心となる武器は大砲だ。海軍の次ぎには陸軍を設けなければならぬ。近頃ヨーロッパのモスコウビア國（ロシア）は遠く手をのばしてダツタンの北地を侵略し、今では蝦夷の東北にあるカムチャツカを自分の領地にしてしまひ、そこから西に下つて、蝦夷の東の千島を手に入れようとしかけてゐる。すでに明和八年に、モスコウビアの大將バコンマリツツといふものがカムチャツカから船を出して日本へやつてきた上、日本の港口を測量して歸つた。それは今に日本に攻めてくる下こしらへかも知れない。かうして日本が海國であるため、外國の船が無理にでも來ようとするればいつでもこられることを考へると用心しなければならぬ。さて、戦争といふことについては、各國それ／＼のやり方がある。日本は白兵戦をまつ先きにして、計略戦は少く、勇氣にまかせ、命を捨てて、直ちに敵を碎くのを第一の戦法とする。その鋒先きは鋭いが戦法は粗末だから、持久戦になると續かない。支那は計はかりごとが多くて、いつでも大事をとるのを戦争の第一として、白兵戦ではとても弱い。自分が長崎に行つてゐるころ、六十一人の支那人が徒黨を組んで亂暴した時、自分は十四人の武士を率ゐて戦ひ、その六十一人にうち勝つたことがある。その時支那人は白兵戦ではとてもろまだといふことを知つた。

ヨーロッパ諸國はいろ／＼な鐵砲を使ひ軍艦も多く造つてゐる。またよく自分の國を治めて舉國一致の實をあげ、他の國を攻めとつて自分の領地にすることをならはしとしてゐる。このことは日本や支那の及ばないところだ。かうした外國の戦ひの仕方や國の事情をよく知つて、わが海國の備へをすることが何より大切である。子平は以上のやうな意味のことを書いてゐる。そして卷の十の終りには次ぎのやうな意味の後書あとがきも書いてゐる。

「自分は先きに『三國通覽圖説』を著はしておいた。もし日本の有志が兵を率ゐて朝鮮や琉球、蝦夷などへ攻め入らねばならない時には、その本を讀めば必ず役に立つ。この『海國兵談』はその上に西洋諸國の軍備の様子を精しく述べた。殊に海軍の戦争の仕方を十分に説明しておいた。これは自分が外國人について、よほど前から長い間かかつて外國の様子をさぐり、それによつて海軍と陸軍の方法を工夫したもので、全く自分の發明である。」

この序文（前書）と跋文（後書）を見ると、子平が「海國兵談」を著はす愛國の目的がよくうかがへるではないか。

二十一、「海國兵談」卷の一

海國兵談の卷の一と卷の二は、子平が序文でいつてゐる通り、「水戦」と題して海軍の方法を精しく述べてゐる。日本は海國だから陸軍よりも海軍を中心としなければならぬ、といふ子平の考へから海戦の術を何よりはじめに述べたのである。百數

精校海國兵談卷之一

林子平 撰
安積貞 校

水戦

海國ノ武備ハ海邊ニアリ海邊ノ兵法ハ水戦ニ
アリ水戦ノ要ハ大筒ニアリ是レ海國自然ノ兵
制ナリ則チ此篇ヲ以テ開卷第一トスルノ微意
ナリ尋常ノ兵書トロヨ同ノ論ス可ラザルヲ
知ベシ
昇平久キキハ人心弛ム人心弛ムキハ亂ヲ忘ル
ト和漢古今ノ通病ナリ之ヲ忘レザルヲ武備ト
云蓋シ武ハ文ト相並テ徳ノ名チリ備ハ事ナリ

「海國兵談」の最初のページ

十年前に工夫した林子平の海軍軍備の方法について、解説しよう。

「日本は海國だから、この港へ敵國の船がやつてくるかも知れないから、長崎の港口にあるやうな石火矢臺（今でいへば海岸砲臺）

を日本國中、東西南北を論ぜず、いたるところに備へて、今から五十年後には日本の海岸全部にこの石火矢臺を設けなければならない。かうすれば日本の全海岸を城壁として、五百里四方の大きな城を築いたやうなもので、とても愉快ではないか。かういふ意味を子平は述べてゐる。子平のこの海岸要塞の計畫は、幕末になつて江川太郎左衛門などがその必要を唱へ、今日では日本全國の肝要な場所にはすべて嚴重な要塞地帯が設けられてゐることは諸君の知るとほりである。

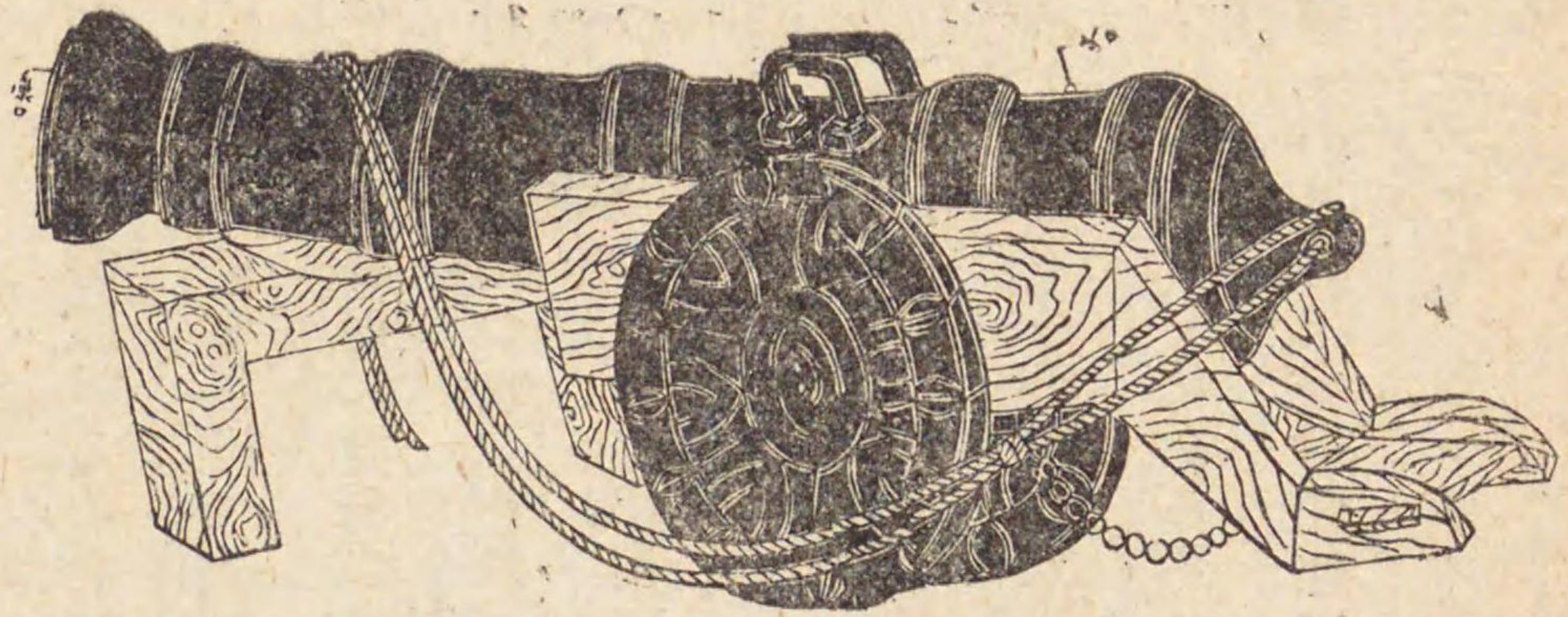
そのはじめは林子平の「海國兵談」から出たといつても差支へないのである。また子平は、

「この海岸要塞を、長崎だけに設けて、安房や相模の港口に備へてゐないのは大へんな手ぬかりだ。」と、をしへて、

「江戸灣の水は、和蘭までも續いてゐるのだから、むしろ、安房と相模の兩國に最初に砲臺を設けるのを日本の全海岸に砲臺を築く手ははじめとしなければならない。」との意味を述べてゐる。このことも幕末になつて江川太郎左衛門が子平の説をうけ繼ぎ、幕府に實行させようとして骨を折つたが、幕府にはその時お金がなくて實行できなかつた、それで幕府はわづかに江戸灣に六つのお臺場をつくつただけであつたが、かうして徳川幕府は林子平の死後何十年も後になつて、子平の先見の明に頭を下げなければならなかつたのである。

子平はかやうにまづ最初に海岸に砲臺を築いて、外敵を防ぐことを述べた上、攻めよせてくる外國の軍艦がどんな風に造られてゐるかを述べてゐる。

ヨーロッパにあるそのころの軍艦の造り方や、それに乘せてある大砲の大きさや、彈丸の目方、發射の仕方、大砲が銅で造られてゐるといふことなどを述べた上「フランスでは、ボンカノンといふ大きな大砲が造られて、これは、海岸や港口に備へ



カノン砲の圖

つけられてあり、對岸を撃つのに用ひられる。」

といふことまで述べて、ボンカノンの長さは一丈、太さは筒の元のところで直徑二尺一寸七分、さきの方で一尺六寸九分、その目方は千二百二十二貫と書いてある。上の圖は、それよりも少し小さいカノン砲の圖で子平が描いて「海國兵談」にのせてあるものである。

子平は日本でもかうした大砲や、彈丸をたくさん造らなければならぬことを論じて、

「そのためには、多くの費用がいるから、人民の華美を禁じ、質素を奨勵して、上下の無駄な費用を省き、

「大筒錢おほはづせん」といふ名目で少しづつ、お金を集め、このお

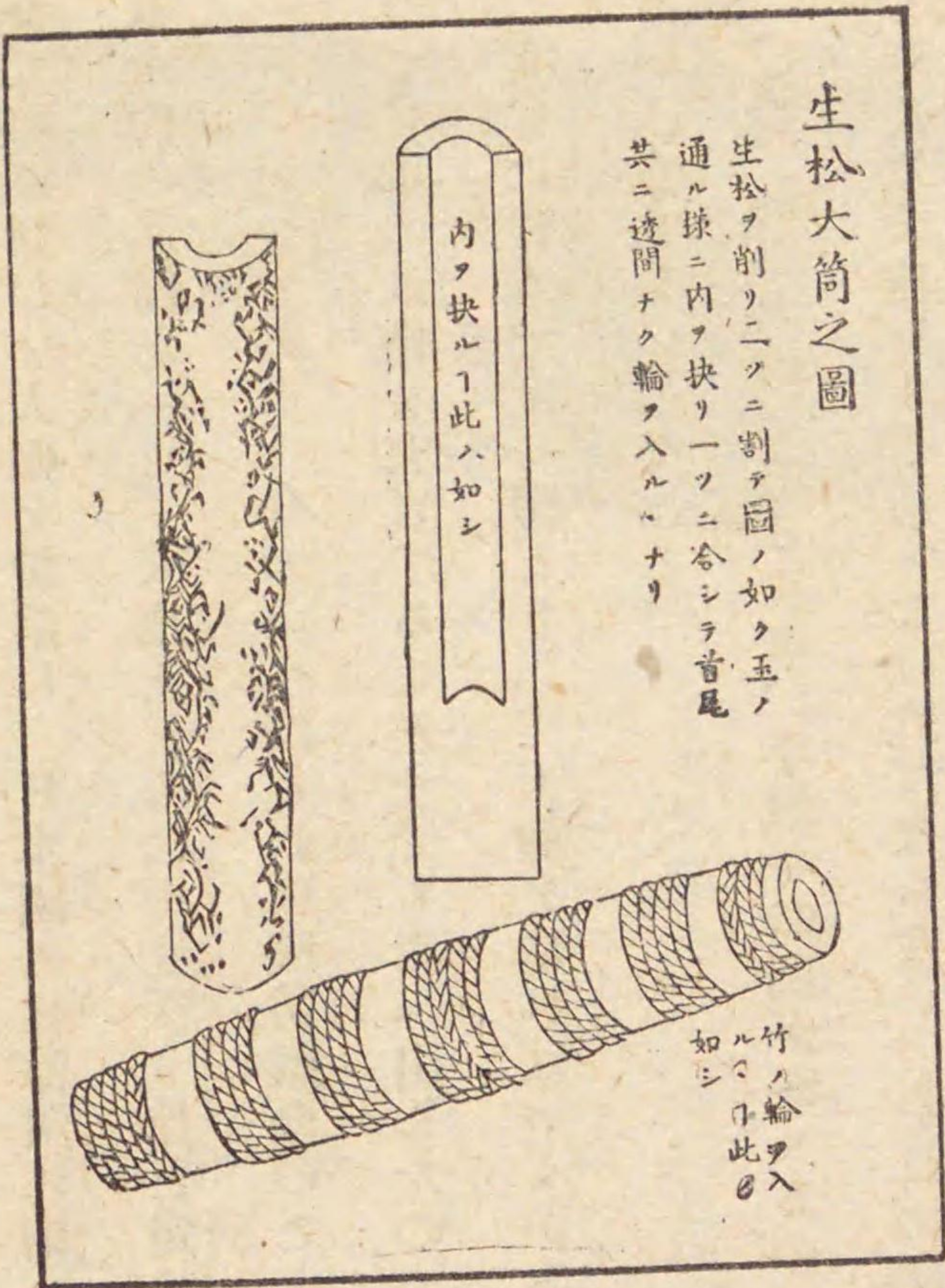
金で年々新しい大砲を製造し、日本國の總海濱に備へつけるやうにする。これを日本永代の武備として、天地とともにやまざる掟と定めなければならぬ。」

と、いつてある。今でいへばこれは國防獻金のことである。子平は國防獻金を以つて日本の武備を充實することまでも考へ出したのである。

次ぎに日本では一體どうして大砲を造ればいゝかといふことについて、子平はかういふ意味をいつてゐる。

「鐵や銅で大砲を造るには、手數や時間がかゝるので、それよりもさきにまづたくさんな大砲をすぐ造らなければならぬ。それには松の木で木製の大砲を造るのである。松の木の木の大砲でも、鐵や銅の大砲と同じやうに彈丸が撃てるのである。但し、五、六發撃てば駄目になつてしまふ。その代りたくさん早く造ることができる。」
かういつて、子平は松の生木を二つに引き割つて中を抉り、外がはからそれに竹

の輪を入れて、圖のやうな大砲にすることを示してゐる。この大砲に火薬を入れ、その上に弾丸をつめて、尻に火をつけると、爆發して弾丸が發射される仕掛けである。では、この松の大砲に使ふ火薬はどうして造るか？それには、「九、二、一の法を用



木製の大砲のつくり方

ひる。」と子平は述べてゐる。「九、二、一の方法」とは、焰硝九匁、灰二匁、硫黄一匁を細かく碎いて煎茶でねり合せ、竹筒の中につき固め、あとで竹を割つてとり出すと、これが火薬なのである。

弾丸は鉛を最上として、鐵がそのつぎで、石^{いしだま}彈や、煉^{ねりだま}彈なども用ひる。煉^{ねりだま}彈といふのは砂と石の外に銅や鐵の滓を、漆や膠でねり固めて丸く布に包んだ彈丸のことである。また上等の粘土に植物の纖維を切り入れて丸形にし、布で包んでよくかわかしたのも彈丸となり、これらの彈を遠くへ飛ばす時には多量の火薬を大砲につめる。近くの目標を撃つ時は、火薬の量を減す。そして彈丸や火薬は急にはできな

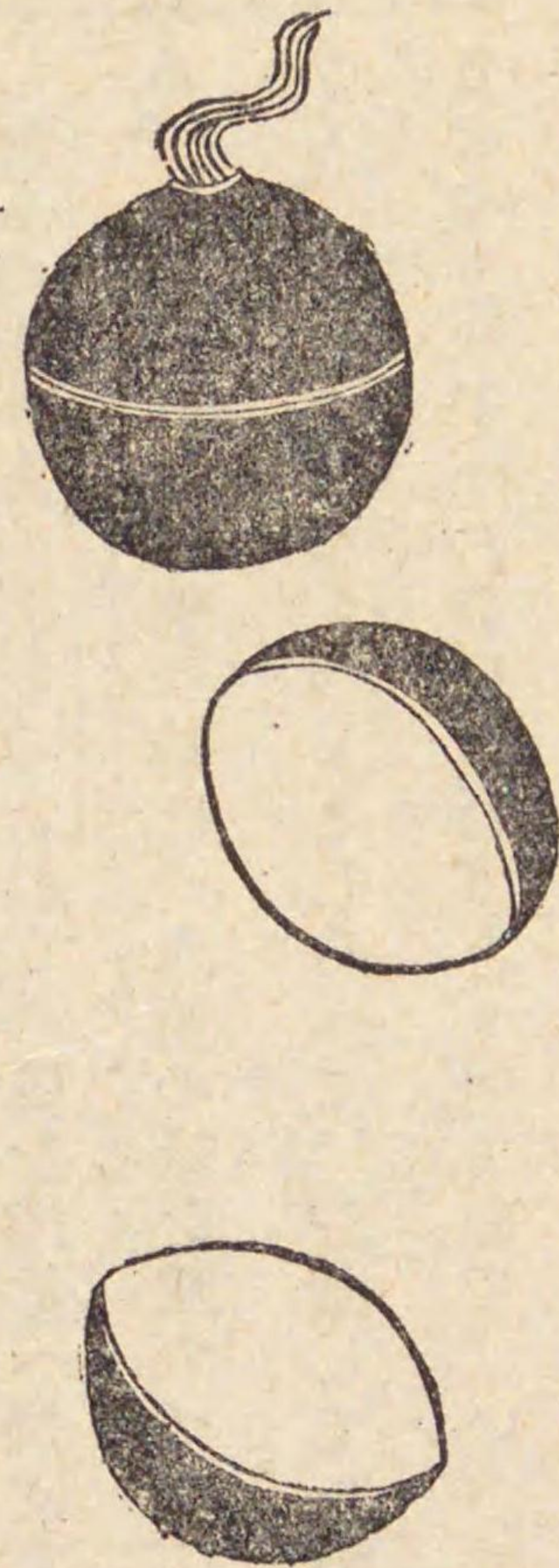
いから、平生から少しづつこしらへて、貯藏しておかなければならない。」

このやうに子平の意見は行きとゞいてゐて、いつでも實行すれば役に立つやうに書かれてゐる。

次に敵船を焼き打ちするための亂火^{らんくわ}の法や火箭^{くわせん}の必要を子平は述べてゐる。今でいへば、亂火や火箭は、焼夷彈や迫擊砲の一種といふことができる。

次に子平は大砲から發射する砲^{ぱう}燄^{らんくわ}火といふ彈丸のつくり方を述べてゐる。それ

には圖のやうに、直徑四寸位の球形の銅の罐をつくり、この中に焰硝えんせう五十匁、硫黄十二匁、灰五匁、松脂やに四匁、樟腦三匁、鼠の糞二匁をそれよく砕いたものを干し固め、長さ二寸ばかりに切り、紙袋に入れたものを四つばかり入れる。隙間のと



火燄砲の圖

ころには導火薬を詰めて、蓋をして砲彈とする。砲彈の外には圖のやうに導火繩をつけて、これに火をつけて、

二、三十個を一時に敵の軍船に大砲で撃ち込むのである。砲彈は敵船の中で爆發してどんな船でもすぐ焼けてしまふ、と子平は書いてゐる。

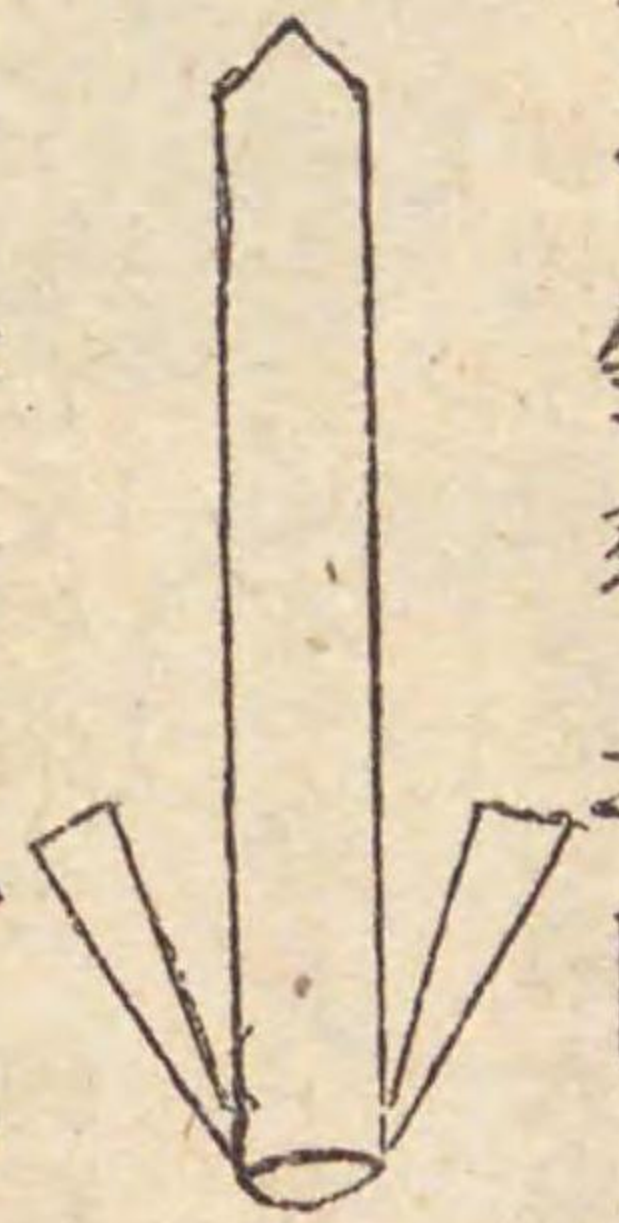
これは今の飛行機から投下する焼夷彈と同じ作用のものを、大砲から發射させや

うといふ仕掛けである。

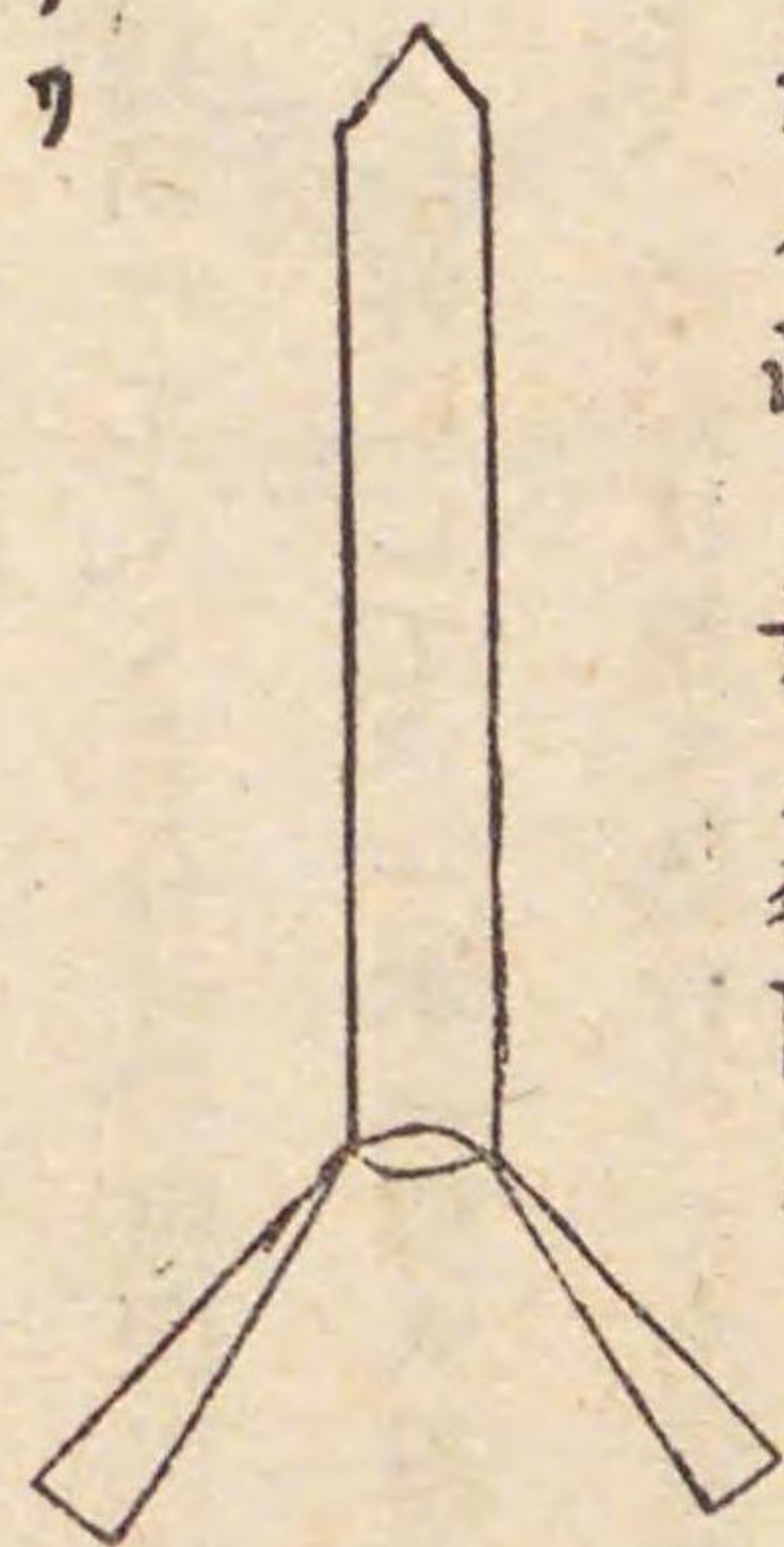
さきに述べた亂火の法と火箭のことも説明しよう。まづ亂火についていへば、子平のいふ亂火とは現在の榴彈砲のことである。そのつくり方を、子平は述べてゐる。即ち長さ二寸の小さな筒をまづつくり、その中に三匁彈を入れて蓋をして火口ひぐちを外に出しておく。これを何個も、何れも火口を外に向けてくゝり合せ、隙間には火薬をつめて、全體を丸く布で巻き、大きな丸い一つの彈にして、一本の導火線を外へ出しておく。使用の際はこの導火線に點火した上、敵船に撃ち込むのである。さうすれば導火線から火が移つて、中にはいつてゐる長さ二寸のたくさんな小さな筒つづが爆發して三匁目彈が散亂し、火薬は船を焼き、彈丸は人を傷つけ物を碎く、といふわけで、榴彈砲に焼夷彈の作用を加へたわけである。これを炮燄火と一しよに敵船に撃ち込むのだ、と子平は説いてゐる。

火箭の方は、長さ二尺、周圍八寸の筒を薄い鐵板でつくり、その中に火薬を入れて大砲に仕かけた上、その筒を發射するのである。筒の尻には二枚の鐵羽根をつけておかなければうまく飛ばない。鐵羽根をつけて發射すると、羽根の作用で火箭は目

筒火箭鐵羽之圖



大筒ニ込ムキハ此ノ如ク折返スナリ

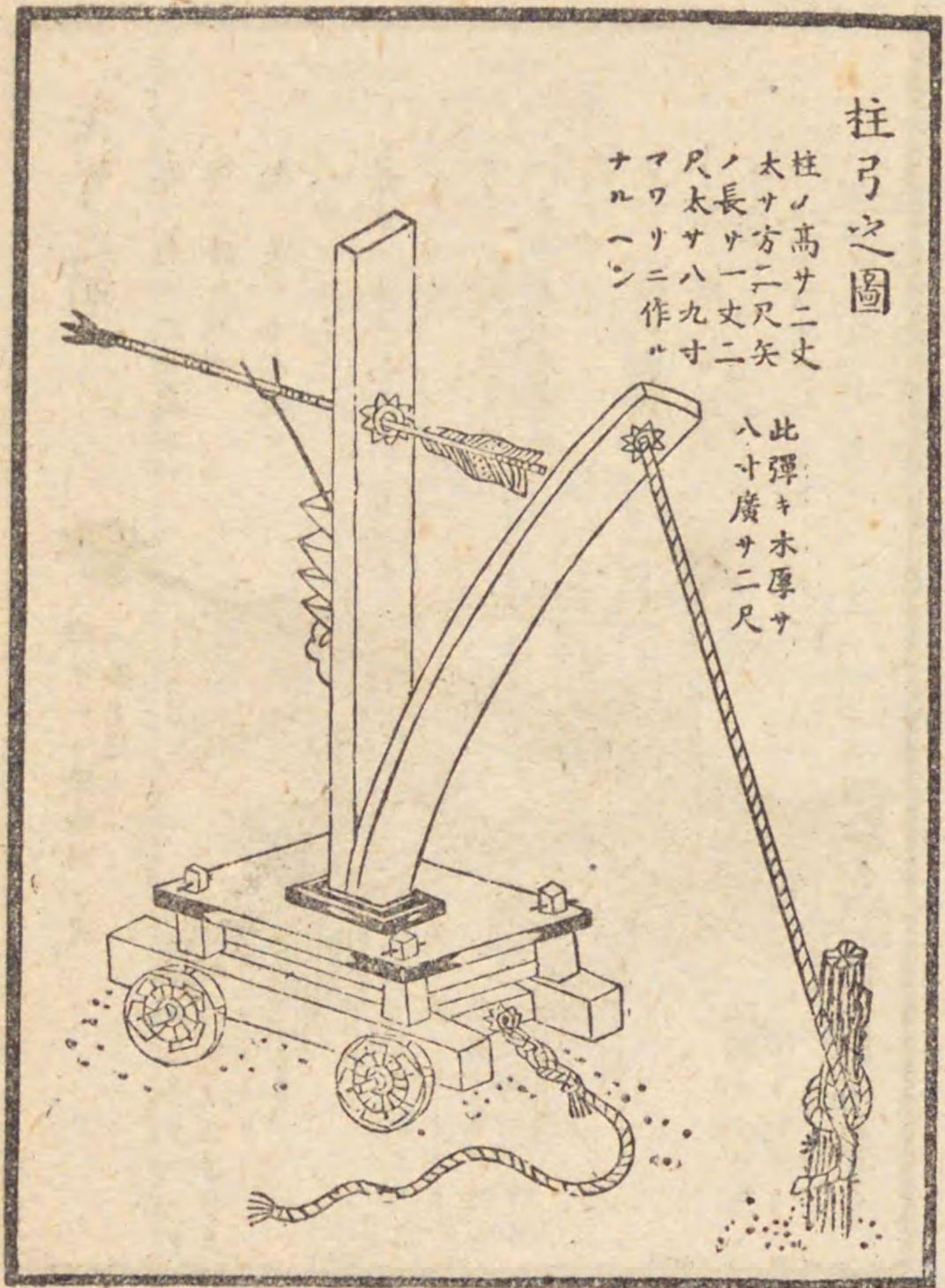


飛フキハ此ノ如ク羽開クナリ

的物に向つて、一直線に突進する。そして目的物に命中すると爆發して、中の火薬が燃え上るのである。鐵羽根を尻につけるといふ工夫が丁度迫撃砲彈のやうである。又子平は火船といふものを考案した。これは小さな舟に柴や茅の乾いたものを一

ばい積みこんであらかじめ油を注いでおき、帆をかけて敵の大船に近づき、いきなり柴に火をつけてもやす。この火がもえ移つて敵船を焼く法である。

柱弓之圖

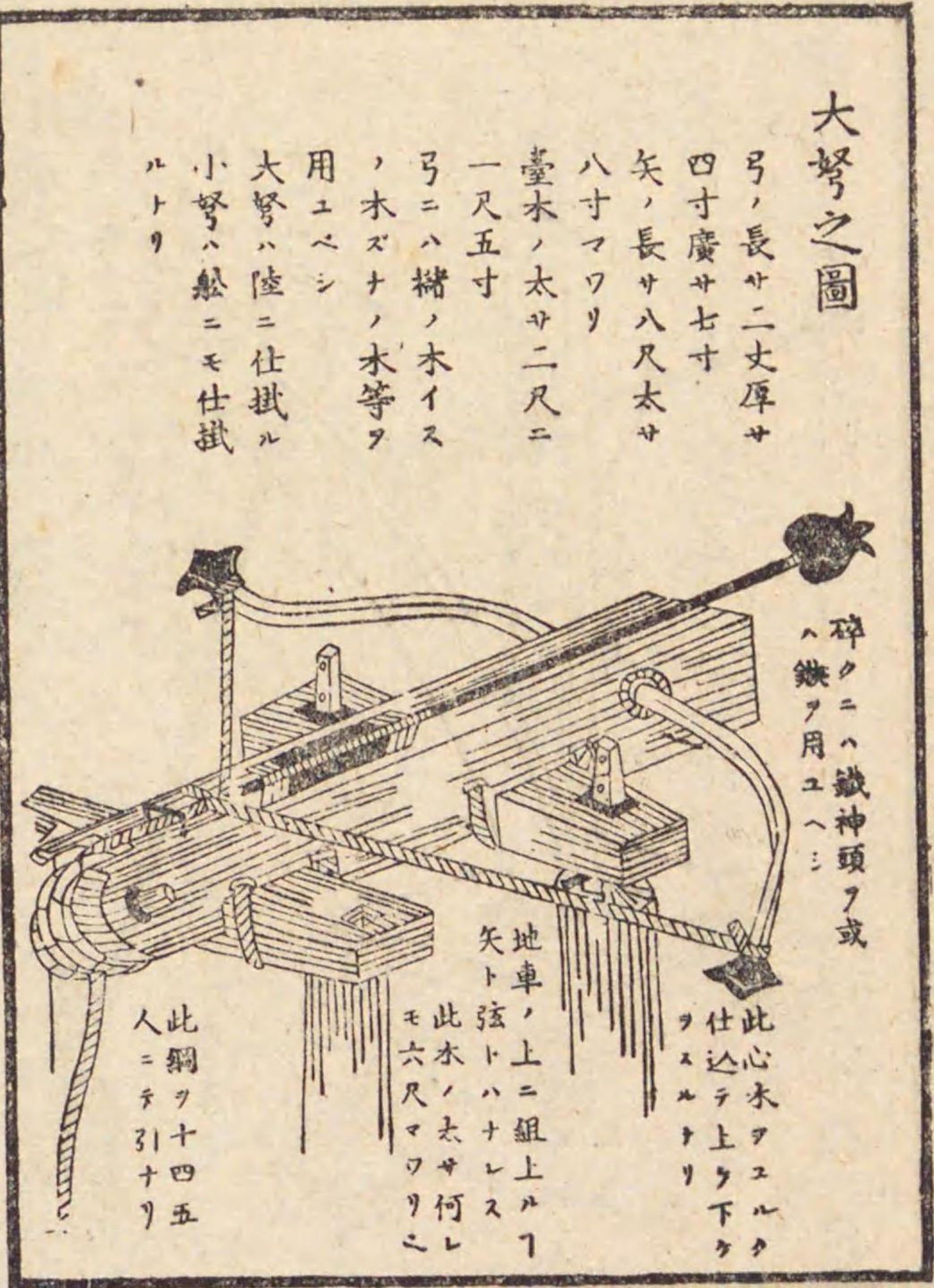


柱ノ高サ二丈
太サ方二尺矢
ノ長サ一丈二
尺太サ八九寸
マワリニ作
ナルヘン
此彈キ木厚サ
八寸廣サ二尺

また敵船を攻撃する
ための大砲以外の色々
な武器を子平は工夫し
た。その中に次ぎのや
うな柱弓や大弩や石彈
がある。柱弓といふの
は、太さ八、九寸、長さ
一丈二尺もあるとても
大きな矢を、圖のやう

大弩之圖

弓ノ長サ二丈厚サ
四寸廣サ七寸
矢ノ長サ八尺太サ
八寸マワリ
臺木ノ太サ二尺ニ
一尺五寸
弓ニハ緒ノ木イヌ
ノ木ズナノ木等ヲ
用ユベシ
大弩ハ陸ニ仕掛ル
小弩ハ船ニモ仕掛
ルトリ



な木板の弾力ではじき
とばして敵船の装甲を
打ち破るのである。

大弩も同様の仕掛け
で、矢の長さ八尺、太
さ八寸、先きが太くな
つてゐるのは鐵の鎚で
これが敵船の船べりに
あたつて穴をあける仕

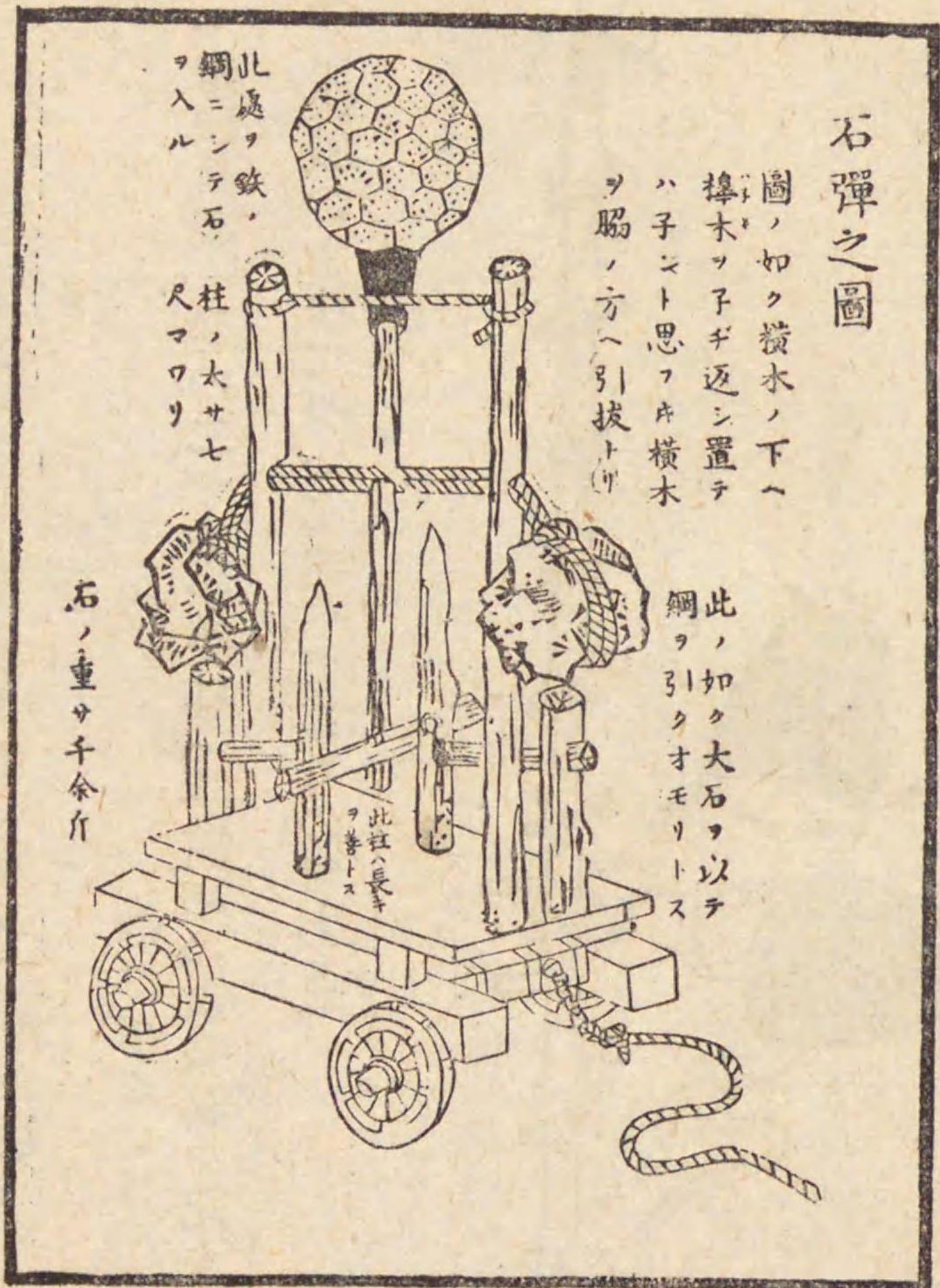
掛けである。

石彈は下の方にバネをつけ、これをあらかじめねぢ返しておいて、不意に引き抜く

と、石彈をつけてある柱が上の石彈の重みで急にひっくりかへつて、大きな石彈が、

石彈之圖

圖ノ如ク横木ノ下ハ
棒木ヲ子ギ返シ置テ
ハ子ニト思フ片横木
ツ脇ノ方へ引抜トリ

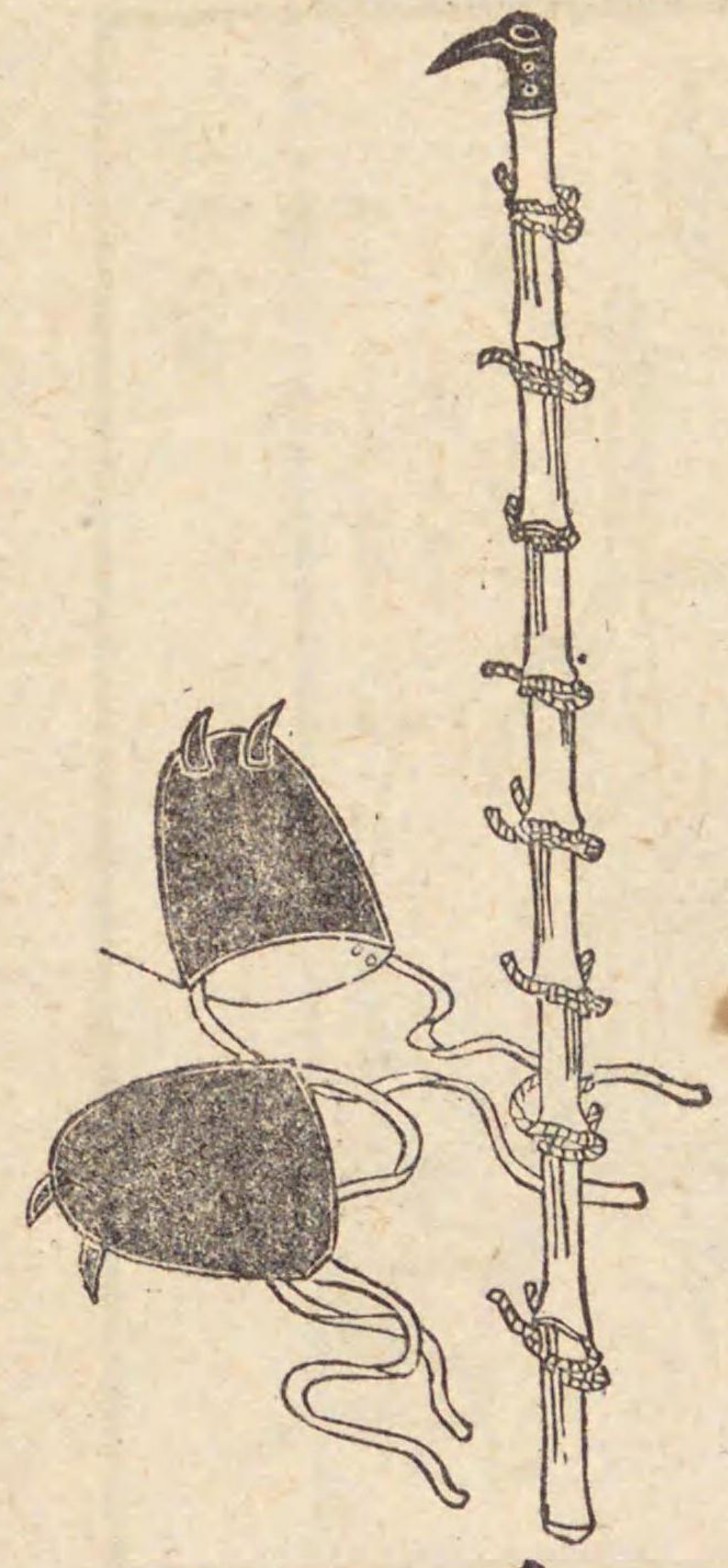


はずみの力で抜けて飛
び出し、目的物に飛ん
で行く仕掛けである。

この三種の武器につ
いては、火薬を用はず
に物理的な作用で彈丸
を發射するために、特
に子平が考案したもの
だとのことわつてある。

二十二、「海國兵談」卷の二

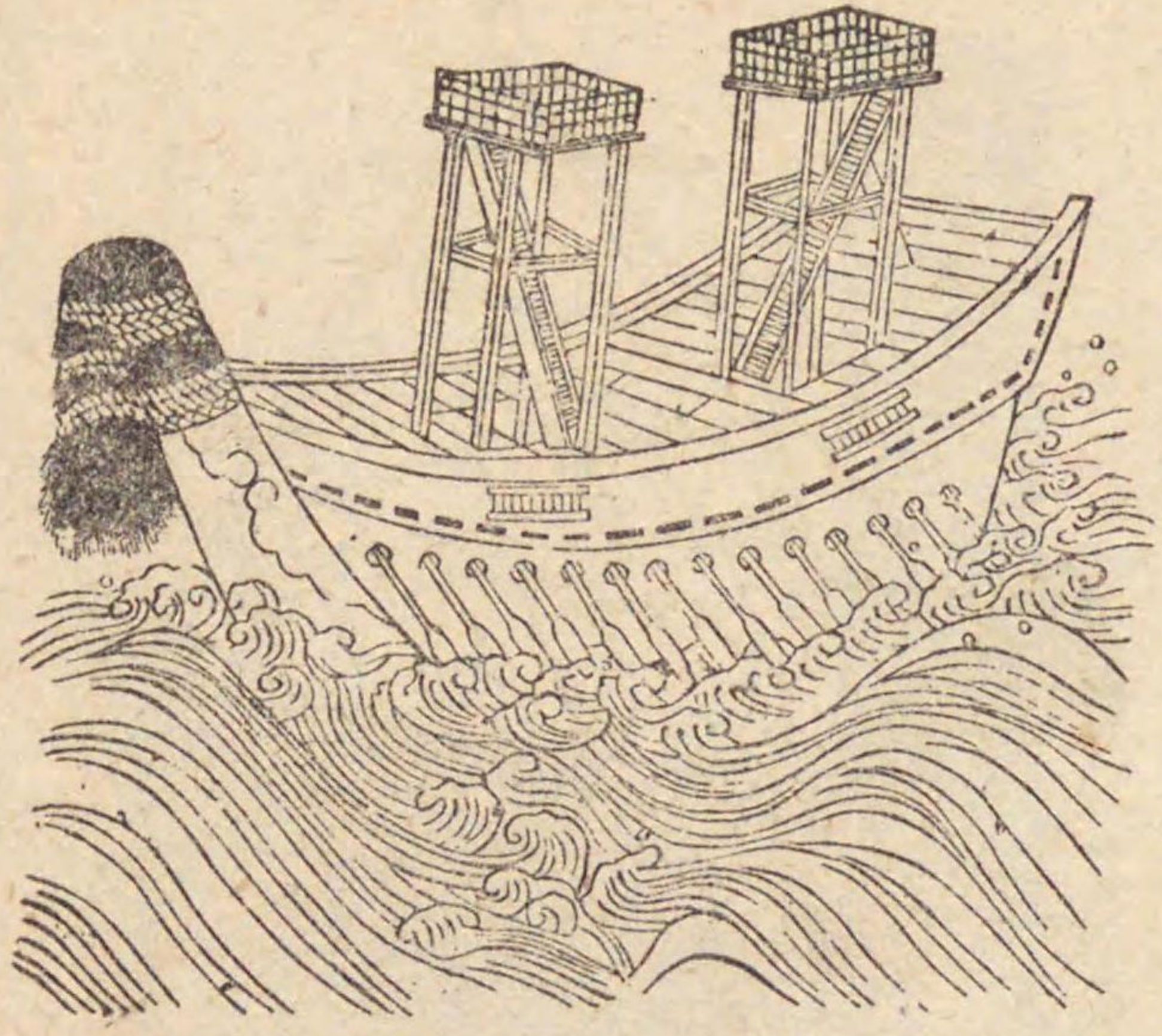
「海國兵談」卷の二では子平は「手詰めの水戦法を記す」といつてゐる。つまり海軍の決戦の方法について述べてゐるのである。



敵船に進入する鳶口と鐵の靴

まづオランダの船についてその長さが二十四五間、横が六間、深さが三丈五六尺から四丈に及ぶといふことを述べ、支

那の船は長さ二十間、横が十五間、深さが二丈餘り。いづれもそのころの船としては日本の船が及びもつかない大きなもので、日本の小舟で押寄せてもどうするすべもないから、これと戦争するには前頁の圖のやうな長柄の鳶口を船べりにうち立て、



樓船の圖

足にはとげのついた鐵靴をはいて敵船にかけのぼるのだといふことを工夫してゐる。次ぎは樓船である。こんな船をつくつてあいて、これを敵船にくつつけ、樓の中の梯子を傳はつて上にかかけ上り、こゝから敵船の甲板に飛びこむ。子平の考へた海軍の決戦はすべて敵の船にこちらから乗りこんで行つて白兵戦を行



竹束船

ふやり方である。

その目的で子平が考案した代表的な軍船は次ぎの竹束船である。舷に竹で編んだ目かくしをとりつけ、敵の砲丸をこれで防ぎながら、敵船にわが船を押しつけ、一方のはしで綱を斬ると、竹束は一時に

海へおちてしまふ。その時竹束のかけにかくれてゐた味方の兵がどつと敵船にのりうつるのである。

また子平は海戦における夜襲を重んじ、船にはいづれも松明たいまつを用意し、敵の船に

乗り移ればすぐに松明に火をつけて船中を明るくしておいた上、さんくんに敵兵を斬りまくるのである。

また水泳の達者なものを小舟に乗せ、數十人を敵船にしのび寄らせて水にくぐり



筒鑿長一尺五寸



これで敵船を沈没させる

入り、敵船の船底に穴をあけて沈没させる方法も子平は考へ出した。

それは、上の圖の如く筒つぼうになつた一尺五寸の鐵の鑿のみと、柄えの短い金槌かなづちを持つて

水底にくぐり、敵の船底に筒鑿を金槌で打ちこむのである。これを何十本といつて打ちこむと、水がここからどんくはいつて敵船はまもなく沈没してしまふ。

この外に敵の氣をくじく術も考へなければならぬ。子平は奇術をもちひて敵の勇氣をくじく方法として、次ぎのやうないろ／＼な工夫をしてゐる。

火天 くわんたう 是ハ處々ニ火ノ燃ユルナリ。

神煙 是ハ處々ニ煙立ツナリ。

毒氣 是ハ晴天ニ霧ヲオコスナリ。

火禽 是ハアマタノ火ノ中ノ玉、中天ヲ飛ブナリ。

火獸 是ハアマタノ火ノ玉、地ヲ走ルナリ。

八面炮 是ハ八方へ飛ビ出ル鐵炮ナリ。

水底龍玉 是ハ水底ニ雷鳴スルナリ。

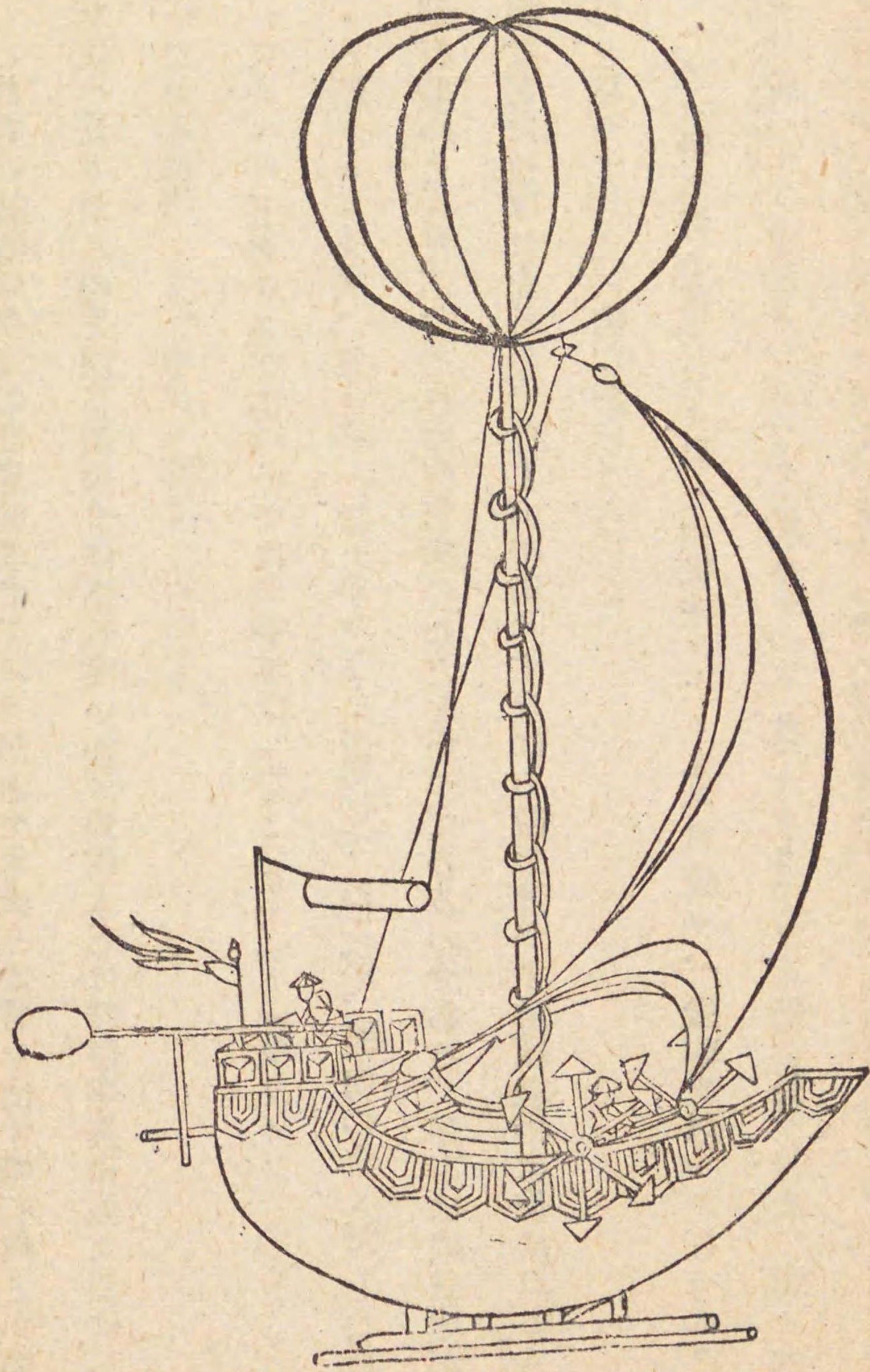
地雷 是ハ地中ニテ雷鳴シテ火炎地上ニ燃エ出デ人ヲ燒クナリ。

理囿古突悉吉不 リユクドシキツブ 是ハ中天ヲ鳥ノ飛ブガ如ク自由ニ乘リマハス舟ナリ。

これらの戦術は今度の世界戦争でドイツがとても大きな音を出す飛行機とか爆弾を使つたりするのと同じ工夫ではあるまいか。地雷などは時限爆弾じげんに似てゐるはしないだらうか。

又リユクドシキツブについては、子平は「『リユクド』トハ氣ヲイフ、『シキツブ』トハ船ノコトナリ、氣ニル船ナリ。」と説明してゐるが、説明のまゝだとまさに飛行船のことだが、これは輕氣球のことをいつてゐるのである。子平は輕氣球が偵察などに使はれたものでなく、奇術、すなはち敵を驚かす神經戦術に使はれるものだと思つてここに例にあげたらしく、

「ソノ船ヲ打チ落スベク思ハバ帆柱ノ上ノ丸キ風袋ヲバ鐵砲ヲ以ツテ打チヌクベシ、囊ふくろのなか中ノ氣漏ルレバソノ船スナハチ落ルナリ、ソノ船ノ長サ三丈、囊ノ大キサ方一丈、帆柱ノ長サ四丈、帆柱ハ鐵ノ張リヌキナリ。」



リュクドシキツプの圖

と、説明して前頁のやうな圖をのせてある。この圖は子平がオランダの「ゲイレキスブック」といふ本からとつたものだとのことわつてゐるが、「自分は貧乏でお金がないから實際にこの船をつくつてみたことはない」といふことも書いてある。

それにしても子平が「ゲイレキスブック」からとつたといふリュクドシキツプの圖はほんたうの輕氣球ともいへない滑稽なものであるが、ともかく林子平が輕氣球のことをまで紹介した「海國兵談」の世に出たのは寛政三年である。

しかし子平が「海國兵談」の原稿を完成したのはその六年前の天明六年である。この時すでに子平は「リュクドシキツプ」のことを知つてゐたわけであるが、フランス人モントゴルフエア兄弟が輕氣球を發明してルイ十六世から賞金をもらひ、一躍有名になつたのは西曆千七百八十三年だから、即ちわが天明三年である。

天明三年にヨーロッパにおいて發明された輕氣球のことを、不正確にはあるが、